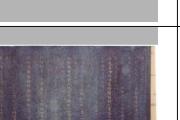
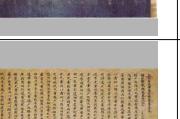


国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	国宝(建造物)	浄土寺多宝塔	じょうどじたっぽうとう	1基	尾道市東久保町	明34.3.27 昭28.3.31(国宝指定)	三間多宝塔、本瓦葺		鎌倉時代末期、嘉慶3年(1328)建立。大日如来及び脇侍(わきじ)(尾道市重要文化財)を安置し、内部には彩色が施され、裏面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。多宝塔としては、規模が大きい上に全体のつくりがよく、高野山金剛三昧院や石山寺の多宝塔と並ぶくれた塔である。牡丹・唐草に蝶の透かし影をした墨段(くさん)など、華麗な装飾に富み、その整った容姿および手法によって、鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年の解体修理で、屋根の上の相輪(さうりん)の中から経巻など多くの納入品が発見された。		関連施設:浄土寺博物館 (0848-37-2361)
国	国宝(建造物)	浄土寺木堂 附厨子1基 棟札2枚 浄土寺境内2枚	じょうどじほんどう	1棟	尾道市東久保町	大24.14 昭28.3.31(国宝指定)	桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、向拝一間、本瓦葺 棟札2枚(嘉慶二年四月十一日、正徳二年四月十一日各一枚)		浄土寺は、鎌倉時代末期(14世紀初め)に炎上したが、尾道の人々によって、数年後には再建された。この本堂も尾道の人沙彌(しゃみ)道達(どうだつ)、比丘尼(びくに)道性(どうじょう)が発願して、鎌倉時代の嘉慶2年(1327)に大工藤原友周、同国友貞により建築されたものである。前面二間通りを外陣とし、うちを内陣とする密教式平面である。和様を基調としているが、唐戸(さんかど)、花肘木(はなひじき)、二斗などを使いたいゆる折衷様式である。		関連施設:浄土寺博物館 (0848-37-2361)
国	国宝(建造物)	向上寺三重塔	こうじょうじさんじゅうとう	1基	尾道市瀬戸田町	大24.14 昭33.2.8(国宝指定)	三間三重塔婆、本瓦葺、高さ19m		室町時代・永享4年(1432)建立の塔。信元・信昌を禮賀として建立された。全体に和様を基調とするが、各層の垂木下部に垂木(おとぎ)たまきとし、花頭(はなつ)などとし、細部にかなり濃厚に禅宗様の手が取入れられている。肘木裏(ひじばり)やすの木持(ひのきもち)などの形象などを巧みに作られ、尾垂木下絶縁肘木(おだきえいようじき)の下端は全部彫刻を施し、色彩を施した鉢型(はんげい)豪華なものである。向上寺は瀬戸田由港北側、瀬戸田水道を一望できる高い丘の上にある。室町時代(1333~1572)に始まる播磨寺院で、小早川氏一族である生口氏と深い関係をもつていた。		
国	国宝(絵画)	絵本著色普賢延命像 図録裏に「延命像仁平三年四月廿一日供養」の墨書きがある	けんほんちやくしょくふげんえんみよ うぞう	1幅	尾道市西土堂町	昭42.6.15 昭43.4.25(名称変更) 昭50.6.12(国宝指定)	二十臂像で四白象にのり各象首には四天王を頂く形式	縦146cm、横85cm	平安時代後期の仁平3年(1153)の作。本品は二十臂(じゆうび)延命像としては最古の作品であり、描写的上でも像頭頸や二十臂をかどらたかどない朱線、強(よし)い墨(すみ)など、大ぶりな彩色文様に加えて、象頭の四天王に見られる力強い動的表現など、鎌倉時代(1192~1332)に見られる画風に近い特色を持つ。時代様式の変遷を知るうえで貴重であり、他の作品の年代決定にあたって基準となる作品である。普賢延命像・特に延命を功徳する普賢菩薩像。腕が2本のものと、20本の腕を持つ二十臂延命像がある。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺阿弥陀堂	じょうどじあみだどう	1棟	尾道市東久保町	大24.14	桁行五間、梁間四間、一重、寄棟造、本瓦葺		浄土寺木堂(国宝)の東隣に立つこの建物は、南北朝時代、康永4年(貞和元、1345)再建と伝えられる。本堂・多宝堂(国宝)が再建された後に建てられたものと思われる。優れた和様建築と評価されている。本堂は阿弥陀如来坐像(重文)である。 浄土寺は尾道有数の古刹(こつち)で、尾道水道東口付近に位置する。鎌倉時代(1192~1332)以後、西大寺流律宗寺院として特に信仰を集めた。		関連施設:浄土寺博物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西国寺金堂 附 厨子 1基	さいこくじこんどう	1棟	尾道市西久保町	大24.14	桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、向拝一間、本瓦葺		西國寺は行基菩薩の開基と伝えられる真言宗の古刹(こつち)である。金堂は、至徳3年(1380)建立で、和様を基調とした建物である。側柱(そくしゆ)上方に二手先で蛇腹支輪及び小天井付に、向拝(こうはい)には三ッ斗組である。それに虹梁(こうりょう)が掛けられ中央(なかそなえ)に基段(かくさん)があり、虹梁の柱外には拳鼻(こぶしば)が、また主柱の方には手接(てあわせ)が出て威厳が示されている。入母造(いりやせづり)の妻飾(まござり)は二重虹梁大瓶束(にじゅこうりょうだいへいぐく)で、屋根に重量感があり、規模壮大で手法雄健な堂宇とした感じを与える。内部の厨子(くりし)、須弥壇(しゅみだん)も秀麗である。木造彫刻師如来坐像(重文)が本尊である。		
国	重要文化財(建造物)	西国寺三重塔	さいこくじさんじゅうとう	1基	尾道市西久保町	大24.14	三間三重塔婆、本瓦葺		この三重塔は、永享元年(1429)足利義教によって建立された。室町時代(1333~1572)によく行われた復古建築の純和様で、和様と禪宗様の混交の風に飽き足らず、奈良時代(710~795)への復帰をめざしたものである。どっしどしだった美しい塔で、回線がなく、石質基礎の上に立つ珍しい遺例である。		
国	重要文化財(建造物)	光明坊十三重塔	こうみょうぼうじゅうじゅうさんじゅうとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺	昭24.2.25	石造、花こう岩製		この塔は、鎌倉時代、永仁2年(1294)建立であり、基盤に銘がある。西大寺流律宗の僧侶である忍性(にんじょう)が建てたと伝えられ、基盤には作者忍性の名のみある。軸は厚く、力強ひ反りを示し、初層四面の仏の墨字(くじ)は美研(みがん)彫りで、雄健な鎌倉時代(1192~1332)の代表的な作品である。光明坊は、生口島南岸のほか中央にある、真言宗の古刹(こつち)である。		
国	重要文化財(建造物)	天寧寺塔婆 附 銘札 1枚	てんねいじとうば	1基	尾道市東土堂町	昭24.2.18	三間三重塔婆(元五重)、本瓦葺		天寧寺は貞治6年(1367)に足利義詮が建て、普明國師を開山した曹洞宗の大寺である。のち本堂などは雷火で焼失し、この塔だけが残った。塔婆は嘉慶2年(1388)の建立で、元禄5年(1692)上の二重を撤去し三重塔婆に改修された。現存する部分は相輪まで当時のものと伝えられ、和様を基調に禅宗様が濃厚に取り入れられ、規模雄大で手法もまたすぐれている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	浄土寺納経塔	じょうどじのうきょうとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造、宝塔基壇付	高さ2.7m	弘安元年(1278)10月、尾道の豪商・光阿弥陀仏のために、子院の光阿吉近(こうあよしき)が建てた供養塔。光阿弥陀仏は、浄土寺が定証(じょうしょう)によって再興される以前に、現在の浄土寺阿弥陀堂などの修造に尽力した人物である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造	高さ3.2m	沙弥行円など四名の逆修(ぎゃくしゅう)や光孝らの追善のため、南北朝時代の貞和4年(1348)10月1日に建立された。 みことなが格狭間(こうさま)つきの基礎の上を美しい反花(かひらばなし)とし、金剛界四仏の種字をさんだ塔身を安置し、突起には八方天を種字で現している。格狭間にには舍立の痕跡が刻まれている。 基礎と塔身の間に起台を入れていることは、伊予や備後南部には宝篋印塔に見られる地方的特色である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺山門 附 株札 1枚	じょうどじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭28.8.11(県指定) 昭28.11.14 平6.7.12(露滴庵(附中門)分割)	四脚門、切妻造、本瓦葺、両袖潜付		浄土寺の表門で、南北朝時代(1333～1392)に再建されたすぐれた建築である。本堂と同じ工匠の手にいったのか、本堂向拝の軒の規矩(くわい)と同様規矩をもつことは、あまり時代の差がないことを示すと思われる。側面の妻の部分の板幕股(かえるまた)に足利氏の家紋である「二引両」が表されている。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭36.3.23	石造	高さ1.9m	浄土寺境内の南側にあり、「足利尊氏の墓」と称されている。 非常に洗練された姿の塔で、各部分の影づりがよく引き継ぎられた複雑な姿である。最下層の反花座(かひらばなざ)にある複合の運び及び基礎侧面の格狭間(こうさま)は大きめであります。塔身には金剛界四仏を種字(しゅじ)で配し、笠の構飾はや外にかなむき、二弧の内側に八方天の種字をあらわしている。 相輪を省略した。南北朝時代(1333～1392)における中国地方の宝篋印塔の代表作である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西郷寺本堂	さいごうじほんどう	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	桁行七間、梁間八間、寄棟造、本瓦葺		南北朝時代の文和2年(1353)に二代目住持の託阿(たくあ)が発願して造られた建築物である。角柱上に舟肘木(ふねじのこ)置くだけの素朴な形式があるが、方之間の内陣の周囲を外陣がぐる形式の平面は淨土教に特徴的で、時宗本堂最も遅い造営として貴重である。 西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に逆行六代の一鏡によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた淨土教の一派。諸念仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	西郷寺山門	さいごうじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	棟門、本瓦葺		室町時代の貞治年間(1362～68)の建築で、板幕股(かえるまた)や破風などに室町時代の様式がみられる。 西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に逆行六代の一鏡によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた淨土教の一派。諸念仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	吉原家住宅 主屋(附便所1棟) 1棟 納屋(附棧社1枚) 1棟 附御守社 1棟 家相図 5枚	よしはらけじゅうたく	2棟	尾道市向島町江奥	昭46.4.30(県指定) 平3.5.31	主屋／桁行20.1m、梁間9.1m、寄棟造、茅葺、西面下屋附廻、本瓦葺 納屋／桁行9.9m、梁間4.0m、切妻造、本瓦葺 鎮守社／一間社流見棚造、鉄板葺		向島の豪農であった吉原家の住宅で、同家に伝わる祈福札などから江戸時代 宽永12年(1635)の建築と想われる。規模の大さな差なく取扱い、土間を開き持株式合の痕跡したされる建築物である。土間の中央には柱を立てています。この建築で大きな空間を形成したのが、当時として珍しい「等身大」の構造である。土間脇に掲げばな(べな)、「初頭の階段では土間の椅子(こじや)や椅子(いす)、その上部に壁もない時代があった古い農家の伝統をそのまま伝えていると思われ、瀬戸内海沿岸の民家の形態をよく保存している。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺 方丈 1棟 唐門 1棟 庫裏及び茶殿 1棟 宝庫 1棟 書院 1棟 霊應庵 1棟 附中門 1棟 鐘楼 2枚 旧食堂厨子及び須弥壇 1具	じょうどじ	6棟	尾道市東久保町	昭63.12.26(県指定) 平6.7.12	方丈／桁行16.0m、梁間13.0m、一重、寄棟造、本瓦葺 唐門／一間向い唐門、本瓦葺 庫裏及び茶殿／角屋付き庫裏と茶殿の複合建築、切妻造、本瓦葺 宝庫／土蔵造、桁行6.0m、梁間3.9m、二階附、切妻造、本瓦葺 書院／長門門、桁行14.9m、梁間5.0m、切妻造、本瓦葺 霊應庵／三蓋台目茶室、水屋及び四畳、四畳半の勝手よりなる、一重、入母屋造、茅葺 附中門／長門門、桁行14.9m、梁間5.0m、切妻造、本瓦葺 鐘楼／2枚 旧食堂厨子及び須弥壇／1具		浄土寺は鎌倉時代(1192～1332)に始まり、尾道を代表する古刹(こ刹)の一つである。境内には本堂、多宝塔や阿弥陀堂などの中世建築と方丈などの近世建築がよく残され、統一された寺院建築群となっている。 庫裏(くらし)及び客殿は享保4年(1719)建立、方丈は元禄3年(1690)尾道の豪商である横木家が施主となって再建したもの。 霊應庵(れいおんあん)は、三蓋台目の席(せき)に水屋と後ろの勝手を付属させた茶室である。豊臣秀吉が桃山城にて建立した御殿(おうてん)を移したとの伝承。文化11年(1814)向島の天満屋が浄土寺に寄進したといういわれで織部(おりべ)好みの風格のある建築である。 唐門は軽やかに作りの小さな一間の向院門で正徳2年(1712)建築、宝庫は二階建て土蔵で、宝應9年(1759)建築。裏門は長門門で18世紀後期の建築である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像(伝安阿弥作)	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	寄木造、素木、玉眼	像高78cm	西國寺客殿間に安置されている仏像で、小柄ながらも秀麗な尊容に、よく調和のとれた影りの深い流れるような衣文のビタにも、鎌倉時代(1192~1332)の安阿弥流の特色がうかがわれる。寺伝によると、本像は快慶の作と言い、かつては「うしら坂」の釈迦堂の本尊であったが、御堂の炎上後、西國寺に安置することになったとい。		
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	一木造	像高91cm、膝張り71cm	平安時代も初期に近い時期(9世紀)の傑作である。西國寺金堂の内陣須弥壇に安置されている本尊仏で、古美術仏として伝来してきたものである。俊麗な面にも森厳にして荘重な穎をたえた、重量感のある仏像で、緋髪(ひげつ)は切付で、彩色のない素木の古い高雅さが感じられる。寺伝によると、横崎普通寺(せんうじ)から迎えた弘法大師の「七仏薬師」のひとつと言われる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造千手觀音立像	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東土堂町	明32.8.1	一木造	像高106cm	平安時代(794~1191)の作。 千手觀音は真數千手のものは数点しかなく、ほとんどが合掌手、宝鉢手の他に両脇に十九本の脇手がある四十二臂(じゆび)像がごく一般的である。本像は四十二臂像で、彩色は剥落しているが、かえって木目が美しい効果的にうらわされている。 寺伝では行基菩薩作と言い、向島余崎城主で村上水軍の将島居資長が寄進したものと伝え、その念持仏として船中に護持し、風浪を凌いでた、「浪文觀音」の俗称もある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造聖德太子立像(開山堂安置) 乾元二年ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大19.3	寄木造、玉眼、彩色、髪をみづらに結い、柄香炉を持つ。	像高94cm	鎌倉時代の乾元2年(1090)、沙弥定暉(じょうしう)が息子の死後にその菩提を弔うために作らせた像といわれる。京に院派の仏師、院派が作った。 「孝徳(こうとく)」と称されるので、玉眼で彩色され、髪はみづらに結い、両手で柄香炉(えごろ)を持った姿である。脇内頭部に「乾元二年法印院作」という墨書きがある。定暉の請文(じょうしうきょうしゅもん)に「聖徳太子十六歳御歿、京都仏師印畫作」というの本像と思われる。 文献と絵文が照応する遺物は珍しい。鎌倉時代末期(14世紀前半)院派の佳作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖德太子立像(開山堂安置)	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大19.3	寄木造、玉眼、彩色、左手に柄香炉、右手に笏を持つ。	像高1.35m	南北朝時代、建保2年(1390)の作で、胎内に墨書きがある。 「祇園(ぎおん)像」と称されるものの、玉眼で彩色されている。攝政は必ず笏(しゃく)を両手で持っているのが特徴で、本像は左手に柄香炉(えごろ)、右手に笏を持っており、攝政像の影響を受けた孝養像の一変形と見られ、同様のものは南北朝時代(1333~1392)前後からその例があらわれる。 同様の太子像中の傑作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	大4.3.26	本体・台座ともカヤの一木造	像高135cm	平安時代初期、9世紀の作と思われる作品で、当時の造像によく見られる本体と台座を櫛(かや)の一本から彫り出した、重厚華嚴な仏像である。また伊勢神宮の神宮寺にあったものという。 釈迦牟尼(しゅうに)とは「新興族の聖者」の意味で、苦行の後に悟りを得て慈悲と知恵(ちえ)により衆生(しゅうじょう)を度济(ささぐ)した仏教の祖である。その教説は久遠常住(くおんじょうじゅう)の仏である釈迦如来として多くの经典的な教主としてされており、日本においても仏教伝来以後多くの造像が行われた。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如來坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町御寺	昭3.8.17	寄木造、漆箔、玉眼	像高83cm	真言宗光明院の本尊で、漆箔で玉眼入り。下品上生の印を結ぶこの仏像は、鎌倉時代(1192~1332)の作ではあるが、顔相は丸味がありふくらんでいて、衣文の様もやわらかく、平安風の匂いを感じさせる秀作である。寺伝によると行基菩薩の作であるとい。		
国	重要文化財(彫刻)	木造淨土曼荼羅刻出龕	もくぞうじょうどまんだらくしづがん	1基	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	檀木を用いて淨土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子	縦13.5cm、横14cm、奥行4cm	龕(がんこ)は、本来は塔の下の室という意味で、厨子状に削(く)られた(ぼみ)中に納められた像を龕像といい、小型のものは繪巻を巡らせる龕像が携帯していった例が多い。 この龕は檀木を用いて淨土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子である。一本から宝鏡閣や七宝の池などに、弥陀三尊(みとさんそく)はめぐらしく、大弟子、天王、菩薩、普賢菩薩、天、地、人、畜生などを五十五段の諸尊や風首の舟などを表現に影こして、淨業淨土を表現しており、それで抜法による精巧で構成の巧みな作品である。 平安時代、12世紀の作。厨子の表面に「高野山無量寿院龕通」の朱墨跡がある。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(南無仏太子像) 頭部内面に建武五年十月廿四日院勢作ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう(なむいしそう)	1軀	尾道市東久保町	昭11.9.18	寄木造、玉眼、彩色	像高68cm	南北朝時代、建武5年(1337)の作。胎内頭部に「建武五年十月廿四日院勢作」の墨書きがある。「南無仏(なんむふつ)」と称されるもので、玉眼入りの彩色された像である。三歳の尊像と言われ、上半身は裸形で下半身に紺の表を着けた姿である。同じ胎内から出土した尊仏の印仏(いんぶつ)には、本寺重修に尽力した道運、道性的の名も見られ、本寺と太子信仰關係も察せられる貴重な作品である。なお、作者の院勢は、孝養像の作者院勢と一緒に京極院派の著名な仏師である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像 像内ニ藤原行光ノ願文及名号等ヲ納ム	もくぞうあみだにょらいゆうぞう	1躯	尾道市瀬戸町瀬戸田	昭14.9.8	寄木造、漆箔	像高60cm	鎌倉時代、天福元年(1233)の作。小像ではあるが、漆箔の上に精緻な戴金(きぎね)を施した秀麗な安阿弥流の小像である。胸内の空洞を金箔で埋められた珍しい例の仏像である。 その胸内には承久元年(1219)に奉じた藤原行光の墨書き文書と千字の名号及び願文が納入されている。願文には天福元年の年號あり。木像は、行光の三十五回忌にその冥福を祈るために造営されたものであるといふが、 行光は源賴朝、義朝の縁につながる人物で、民衆拯、政所執事、信濃守などの要職にあった。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面觀音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゆうぞう	1躯	尾道市桜山田甲	昭24.2.18	一木造、上下二段の背割りがある。素木	像高190cm	平安時代(794~1191)の作。摩訶衍(まかえん)寺の本尊で、冠帯は欠いているが天冠台を彫り出し、彫眼の像は、余角(じょうかく)をくりぬいた腕輪(わんぜん)を彫り出してある。すこぶる重感のある堂々とした像であるが、天衣や裳の形は比較的浅い。背面の脇部脛と腕部に内割(うちわり)があるが、その納入品についての寺伝はない。この像は、たびたび災厄にあつたためか、彩色はほとんど剥落し、化仏、手足や天衣の先端は欠失し、現存のそれらは後補である。		
国	重要文化財(彫刻)	木造仏涅槃像	もくぞうぶつねはんぞう	1躯	尾道市御調町市	昭24.2.18	寄木造、漆箔、玉眼	像高150cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。 足裏には、一切筋割の模様を施して迷界に再生する毒虫を滅却した境地と言われ、釈迦の死の時而言う。般若が沙羅双樹(さらうじゆ)の下で右膝(ひざ)にじて横臥し、その周囲をとりまいて、迦廻の弟子の僧達や俗人から鬼神、動物が悲嘆し哭むる有様を描いた。涅槃図は多いが、技術的むちなし、深刻は少ない。 本像は玉眼入(漆箔)の身体大の数少ない涅槃像のひとつである。「萩駿追」とも俗称されるこの像の現存する最もものは、法隆寺五重塔の初重四面の塑像群で白鳳時代(6世紀)。奈良明日香村の圓寺のものは天平時代(8世紀中葉)。他には本像と同じ鎌倉時代のものが香川県の観音寺にある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像 像内に巧匠安阿弥陀仏、伊豆御山常行常御 仏、建仁元年十月口日の銘がある	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸町瀬戸田	昭38.2.14	寄木造、漆箔、袈裟座にのる	像高74.0cm	漆箔で袈裟座(もかけざ)に坐るこの像は、銘文にあるようにも伊豆山権現(走湯山・神奈川県)常行室の本尊であったもので、鎌倉時代、建仁元年(1201)快慶(安阿弥、あんなみ)の若い時代の作品である。形の整った安阿弥風のむだやかな作風のもので、宝冠をついた、阿弥陀像としては珍しい形式の仏像である。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造觀音菩薩立像 附 木造觀音菩薩立像 1躯	もくぞうかんのんばさつりゆうぞう	1躯	尾道市向東町	昭52.6.11	一木造	像高178.0cm	等身の一大形像で、肩幅広く質感豊かな木製や釋迦(ほんば)尼の衣文には平安時代初期(9世紀)の余風を残しているが、整体的にまだかかれて簡單にはつておらず、10世紀の制作と考えられる。堂々とした風格があり、肩幅も比較的大きく、佛像地方の平安時代の作と推定されるすぐれた作品である。 付(つけ)たる菩薩像は木目柄にて伝出したものであるが、作柄に地方風が強く、この地方の造像傾向の変遷の一端をつかう遺作として価値がある。11世紀の作と考えられる。		
国	重要文化財(工芸品)	銅製五鈴鉢(伝僧空海将来)	どうせいごれい	1口	尾道市西久保町	明32.8.1	銅製	高さ22cm、口径5.5cm	五鈴鉢は金剛鉢と総称されるものの一つで、密教修法時の諸具を華蓋(けい)秋葉(あきは)ささぎ、眼(まなこ)といふ心を呼びさすために用いられる。本品は鉢身に仏像を結出した五鈴仏鉢で、その仏像の種類によって天帝(てんたい)・第四天帝(よんてんたい)・ぼんてんないしきく(てんたい)と称されるものである。据柄(つきは)は蓮華(れんげ)をたどり、五鈴は獅子(し)の爪(く)をした精巧な細工の逸品で、寺伝に弘法大師将来(弘法大師)の御唐瓶(9世紀頃)の作品である。		
国	重要文化財(工芸品)	錦杖	しゃくじょう	1柄	尾道市西久保町	明44.4.17	銅製	長さ79.6cm	錦杖は有声杖とも言われ、頭部の輪形に遊綱(ゆうかん)を通し、これを握て音を出すものである。錦杖の渡辺は仏教初伝の頃とされ、長さは丈身丈で、字の如く杖として用いられていたが、後には柄を短くして手錦杖(てんきじょう)とよばれ、杖としてではなく法事の時の梵音具として用いられるようになった。この錦杖も「手錦杖」で、双龍の頭に蓮華をした花瓶をあき、竜尾で錦杖の輪をかたどり、頂上に定印(じょういん)の三尊仏を配し、朱色の短い杖をつけた精巧な細工の逸品である。寺伝では弘法大師将来(弘法大師)の御唐瓶(9世紀頃)の作である。		
国	重要文化財(工芸品)	唐花鷲八稜鏡	とうかえんおうはちりょうきょう	1面	尾道市瀬戸町瀬戸田	昭17.12.22		直径29.5cm	この鏡は、伊勢神宮の神官の系譜の家に伝承されたもので、花芯座とも言うべき底が紐の周囲にあり、内外区の界面はあるが、内外の文様は同一系統であるので自由に連続している。鷲(おとずれ)と唐花(とうげ)は相対しており、その邊は優雅流麗で、錦技(きんぎ)よりも非常にすぐれており、保存も完好的鎌倉時代(1192~1332)における和鏡の逸品である。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	孔雀倉戈金経箱 蓋裏に「延祐二年梁撣正明慶寺前宋家造」外 底に「延文三年六月日」の銘がある	くじやくそうきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭30.2.2		縦40cm、横22cm、高さ25cm	中国南部の杭州で、元の延祐2年(1315)に製作された箱である。その後、日本に輸入され、南北朝時代の延祐3年(1318)には淨土寺で最勝王経の収蔵とされた。 内部に朱漆、外側に黒漆をほどこし、孔雀が彫影されている。蓋に「龍、身に性」の文字が彫られ、蓋裏に「延祐二年梁撣正明慶寺前宋家造」の銘がある。 元々は船用品で、製作年代、製作地、製作者と明確な中國漆器史上の貴重な逸品で、製作年の明記された(1341)日本では沈金と呼ばれる技術の作品としては最古のものである。 光明坊(吉野)は瀬戸田町のものと姉妹品で、大きさ及び形状はほとんど同じである。また、淨土寺の孔雀又は金経箱とは大きさは違うが、歴史などはほとんど同一である。		奈良国立博物館に寄託 関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	孔雀倉文金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禪正杭州油局橋金家造」内底に「延祐二年棟梁禪正」の銘がある	くじやくそうきんきょうばこ	1合	尾道市瀬戸田町御寺	昭30.2.2		高25.2cm、縦39.8cm、横22.3cm	淨土寺(尾道市)旧蔵のもので、淨土寺にある「孔雀文沈金経箱」(重文)「孔雀[84a]金経箱」(重文)の二合とは姉妹品で、特に後者は大きさ及び銘文はほとんど同じである。黒漆塗の面に雀と宝相華(ほうそうげ)の文様を書きわめて精緻に[84a]金影りした精巧な舶載の工芸品で、刀技は単純鋭利、形態は素雅な元時代(1271~1368)の漆工の名品である。延祐2年(1315)銘がある。		東京国立博物館に寄託
国	重要文化財(工芸品)	銅水瓶	どうすいひょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭34.6.27		高さ27.5cm、胴径13.7cm。	水瓶は、もともとは僧侶が仏道修行に必要とする用具の一つであったが、供養具として仏前の献水に用いられるようになったものである。この水瓶は、獣子のまみのある蓋がついた鎌倉時代(1192~1332)の作で、志貴山形水瓶と呼ばれる形のものである。やや太自で、肩に水平の面取を作り、長い注口と把手を持つという形をしている。この形態の水瓶は法会の時の淨(じよ)瓶に用いられることがある。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	金銅五鉢 附 金銅五鉢杵 1口 金銅金剛堅 1面	こんどうごこれい	1口	尾道市西久保町	昭36.2.17	金銅製、鋳造品	五鉢／高さ21.5cm、口径8.6cm 五鉢杵／長さ19.6cm 金剛堅／直径26.1cm	この五鉢は、中帝に輪宝文を、肩帯に独鉢、口帶に三鉢を飾出している珍しい作で、精緻な細工を施した形態の美しい鉢である。五鉢杵・金剛堅とともに一具として伝存する鎌倉時代初期(12世紀末~13世紀初め)の製作である。寺伝によると、この一具は白河法皇から西國寺中興の僧慶がんに下賜されたものという。		
国	重要文化財(工芸品)	孔雀文沈金経箱	くじやくもんちんきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭44.6.20		縦54cm、横36cm、高さ29cm	尾道淨土寺に伝わる元の時代(1271~1368)の作品で、延祐2年(1315)銘の淨土寺所有孔雀[84a]金(くじやくきん)経箱や光明坊所有孔雀[84a]金経箱と意匠がほとんど同じである。同時代に製作されたと思われる。		関連施設:淨土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書親世音法楽和歌 建武三年五月五日尊氏証判アリ	しほんぼくしょかんせおんほうらわ か	1巻	尾道市東久保町	明37.8.29	宝相華文紺表紙、紺紙金泥		足利義氏は建武政府に反して間もなく九州に敗走したが、その途中淨土寺に船を寄せて本尊の般若波羅密多塔頭回の祈願をしている。その後數か月で勢を回復した足利義氏が上洛の途次(の建武3年(1336)5月5日、再び淨土寺親類堂に参籠した時、尊氏と弟の直義等6人が木尊十一面絹音菩薩の前に、絹音菩薩の和歌33首を詠じて宝前に供えたものである。この中に尊氏の詠歌は7首で、巻頭の花押は尊氏の証判である。		関連施設:淨土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書定証記請文 嘉元四年トアリ 附 同案文(残簡)1通	しほんぼくしょじょうしうきしょも ん	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	巻初は金字銀字の文書、紺紙金銀泥	縦27.5cm、横671cm	鎌倉時代の嘉元4年(1300)、真言律宗の西大寺叡尊(1201~1290)の弟子定証が淨土寺の伽藍を再興する際の自筆詔勅文である。尾道の人光阿弥院の所蔵。定証以前の淨土寺は吉州鷲山西に所屬し、尾道の人光阿弥院が本堂・五重塔・多宝塔・塔頭などを建てさせていたが、専属の僧侶もおらず開院していた。淨土寺が定証に遷座されると後の動進につけて更に金堂・食堂・僧房・厨舎が造営され、広大な地域の人々の信仰を集めまる活気のあつたことが記されている。		関連施設:淨土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書淨土寺文書 寺領注文建武四年十月日トアリ1通、尊氏寄進 状外9通	しほんぼくしょじょうじょうじょも ん	1幅	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本墨書	縦27.6cm、横1180cm	淨土寺に所蔵されている中世文書115通のうちの11通である。淨土寺領因島地頭方年貢注文や足利義氏寄進状、足利義教御判御文書など、南北朝時代(14世紀)から室町時代初期(15世紀前半)の古文書の一部である。		関連施設:淨土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥法華經卷第七 天慶三年ノ奥書アリ	こんしきんぎんでいほけきょう	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本	縦34.2cm、横92.4cm	平安時代中期(10世紀)の装飾経。法華經の巻第七の巻初は金字の行と銀字の行を1行ごとに交互に記し、後段は金泥(きんねい)書きにしたものである。巻末に、天慶3年(949)6月22日に則常と女性の物部氏が檀主として奉仕した旨の奥書きがあり、平安時代中期における金銀文交書(こうじゆ)経として注目される経巻である。		関連施設:淨土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若經卷第九十九 「薬師寺印」朱印並「薬師寺金堂」ノ黒印アリ	しほんぼくしょだいはんにやきょう	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書	縦32.1cm、横35.8cm	「魚糞經(ぎょこうきょう)」と呼ばれる古くから朝野宿弊魚糞(うおかや)発願経と伝えられるものの巻一で、奈良時代(8世紀)の代表的な写経のひとつである。魚糞は奈良時代末から平安時代初期(8世紀終り~9世紀初め)にかけての人物で、医者であり能文家として知られる。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書き正親町天皇宸翰御消息 (青蓮院宛)	しほんばくしょくわおぎまちてのうしんかんみしょくぞく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	綴葉装、平仮名	縦14.4cm、横124cm	戦国時代から安土桃山時代の天皇、正親町天皇(在位1557～1568)が京都の青蓮院(しょうれいん)へ門跡(もんぜき)にて宛てた書状である。新年のお祝いに対して返礼を述べたもので、ちら書きで記されている。 正親町天皇は、天皇位を継いだ後3年を経て即位礼をあげたこととされる。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書き光院御筆御消息 (五月十五日青蓮院宛)	しほんばくしょこういんおんひつみしょくぞく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書き、折本	26.0 × 10.8cm(第1巻表紙)	陽光院は正親町天皇の第一皇子・誠仁(さねひな)親王の死後に追贈された尊号である。端田信長によつて次代の天皇候補とされ、信長の死後も即位直近と見られていたが、天文14年(1568)に病没した。天文13年(1568)、誠仁親王が青蓮院尊朝親王にあてた書状で、大和の守武親(どうのみね、奈良県)が勅願所であることから、天下が静まつたこの時に内大臣・豊臣秀吉の尽力を依頼するよう求めている。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書き別異弘願性戒鈔	しほんばくしょべついがんしょかいしょう	1帖	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	表紙は宝相華唐草文、見返し絵。軸は緑金襷形。	縦25.8cm、全長85～148cm	鎌倉時代(1192～1332年)の天台宗主(さざ)・慈円(1155～1225年)が筆者と伝えられる書籍。京都の青蓮院に伝来した鎌倉時代中期の浄土宗系統の注釈書の一種である。 綴業(てくぎょう)装で、別異弘願(べいしゆこうねん)弥陀四十八願について往生讃謡及び經疏の注釈を加入了るもので、平仮名書きであることは、鎌倉時代の念仏思想の一端を示す好資料である。 ※慈円…藤原忠通の子。歌人であり史書「恩賜抄」の著者として知られる。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	貴之家歌合	つらゆきけうたあわせ	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭36.2.17	紙本墨書き	縦28.3cm、全長9.22cm.	歌合(うたあわせ)とは、平安時代初期(9世紀前半)以来宮廷や貴族の間で流行した遊戯で、左右に分れた歌人がその詠じた歌左右一首を詠み合わせ、優劣を争いで勝負を競う遊びである。 この一巻は、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)、藤原忠通の命で仁和年間から大治年間(885～1105)に行われた貴之家歌合別類聚集(類聚歌合)20巻の巻十一の一部である。筆者の確証はないが、藤原忠通の子の藤原俊成(つむなり)の手によるものとされる。 天文2年(939)周防国国衙で催された紀貫之(きのうらき)の歌合の歌六番十二首を収めた断簡で、和歌資料として貴重なものである。 ※紀貫之(967～945)…平安時代初期の歌人		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(考古資料)	日向国奥津郡持田古墳出土品 画文帝神獸鏡1面、变形四獸鏡1面	ひゅうがのくにこゆぐんもちだふん しゃくじひん がもんたいしんじきょう へんかいしゅうきょう	2面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭37.6.21	画文帝神獸鏡(中国鏡、平線、四神四獸鏡) 变形四獸鏡(倭製)	画文帝神獸鏡／直径21cm 变形四獸鏡／直径20cm	持田古墳群第25号墳(宮崎県兒湯郡高鍋町持田)出土の青銅鏡。 画文帝神獸鏡は、中国六朝(いくよ)時代(～7世紀はじめ)の鋳造と思われる平線の四神四獸鏡で、紐(ひも)を押して有筋弧文(ゆせつこくぶん)があり、その内区には神龍彫(かみりゆうび)を大きくあわせ、それの間に隨侍する多くの神人禽獸(じんじゆう)が浮き出している。内区には半円方孔で、外区に内側に禽獸(じんじゆう)を、外側には变形文帯をめぐらしている。銘文がある。 变形四獸鏡は、倭(しづか)製鏡され、内区の四獸頭部には叉角(しゃくかく)が認められ、外縁に「火寛」の二文字を鏽刻(さくこく)している。 ※持田古墳群…5～6世紀の古墳群		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	名勝	浄土寺庭園	じょうどじていえん		尾道市東久保町	昭52.5.7			浄土寺境内の西北部、方丈(ほうじょう)と庫裡(くり)とに東南を圍むる龜山(かめさん)泉(せんせん)庭(てい)である。山門を利用して龜山を構え、前庭白砂敷との間にめい池を設ける。龜山一面に多数の石を配し、中央湧水の石組には持田(おとだ)の墓碑を記録している。方丈と庫裡から飛石を打ち並べ、龜山の両側から龜山背後の茶室(露庵庵(ろあんあん))の地に繋いでいる。リゾートやソーティング等の利用が多い。 寺の古絵図によつて本堂文化3年(1806)長谷川千柳によって作庭され、いわゆる「行の庭室」の様式によつたものであることが知られる。またこの絵図によつて作庭当初の地割と石組が良好保存されていることが明らかである。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(建造物)	西国寺仁王門	さいこくじにおうもん	1棟	尾道市西久保町	昭44.4.28	三間一戸、入母屋造、本瓦葺。		江戸時代の慶安元年(1648)の建立の仁王門である。県内に数少ない楼門形式の仁王門で、建立年代から比較的古く式とみられる。格調の高い建物である。 元文5年(1710)の棟札があり、その時の修復で、尾道の豪商・泉屋新助を施工に、大工を藤原五良兵衛(とうげんごりょうべ)、大工194人、屋根葺き職人21人、人夫191人、合力人夫212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師絵伝	けんぱんちやくしょくこうぼうだいし えでん	8幅	尾道市東久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦152cm、横96cm	奈良時代中期(15世紀)に製作された、弘法大師の一生を説く絵伝である。この類の絵伝は各地に多く残されているが、この絵は各部分とも力強い筆致のものと結ばれてある。 第一軸は「大師誕生から久米寺感経」まで、第二軸は「入唐から清水書き」まで、第三軸は「惠思拝謁から竺抜鉢」、第四軸は「応天文寺感経」まで、第五軸は「東寺創建から二荒日光」まで、第六軸は「入定御葬見送」まで、第七軸は「第八軸」、第八軸は「高野奉行」が描かれている。また、図の下から上へストーリーが展開している。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師像	けんぱんちやくしょくこうぼうだいし ぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦78cm、横39cm	高野山の真如親王筆の御影の系統に属する作品で、小幅ながらその幅下に高野壇上伽藍の景を描いているのは珍しく、その布顔から見て天保3年(1837)の一部伽藍の焼失以前の情景を描いたものと思われ、それから判断して鎌倉時代末期(14世紀前半)の作かと考えられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地蔵菩薩像	けんぱんちやくしょくじぞうぼさつそう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦110cm、横55cm	地蔵菩薩は、六道の衆生を救う菩薩と言われ、わけても地獄における救済の力を中心として信仰され、わが国でも平安時代中期から鎌倉時代(1185~1332)にかけて信仰が盛んになり、庶民生活と結びつき、その造像、絵画は多い。 本品も、そのような室町時代(1333~1572)に描かれたと思われる作品で、左足を下げ、右足を立膝にして岩座に坐す。右手を額にそえ、左手には錦杖(じくじょう)を持ち、左右に掌善童子、掌惡童子の二童子を配した誕命地蔵菩薩の像である。彩色は戴金(きりがね)・金泥・緑青や朱を用いて精緻に描いた色彩感の豊かな画像である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人像	けんぱんちやくしょくほうぜんじょうにんそう	1幅	尾道市東土堂町	昭37.7.20	絹本着色 輸装	縦69cm、横42cm	浄土宗の光明寺に古くから伝わる画像で、黒の洗衣をまとった高麗體(こうらいへい)の墨に坐り、数珠を手にし頬骨を高く頭は二段に描かれたいわゆる法然頭である。法然の画像としてはごく古いもので、寺伝によると円光大師(法然)自筆の草書というが、画面に建暦四年(1379~1381)正月六日とあり、室町時代初期(14世紀)の作であることが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絵馬(錢鳥毛〇毛) ※鶴の俗字、〇は馬へんに線のツケ	えま(そうもうりょくもう)	2面	尾道市東久保町	昭41.4.28		縦158cm、横176cm	天正5年(1577)播磨明石郡船入(ふなげ)(現在の兵庫県明石市船上町)の石井と次郎兵衛尉が奉納した絵馬。 2枚1対の大形の絵馬で、細い線に木材の薄板を縫に貼り合わせ、その表面に紙をはり、首をあげた[640]毛の馬と頭をふいた姿の[641]毛の馬と一緒に墨淡彩で描いたものである。いずれも机に縛つながられており、鞍はつけない強力・雄健な絵である。 奉納者の石井と次郎兵衛は、後に豊臣政権の水軍の一員としてその名が見える人物であり、瀬戸内の海上交易に従事していたと推測される。安土桃山時代(1573~1602)の尾道と瀬戸内の海上交通の実態をうかがわせる資料となっている。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	光明本尊	こうみょうほんぞん	1幅	尾道市久保町	昭41.4.28	絹本着色、輸装	縦149cm、横91cm	光明本尊は初期真宗教団の礼拝の対象として使用されたもので、古くは三幅一対であったが、その後一軸ものへ一般的になった。 本品は南北朝時代(1333~1392)のものと考えられ、本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を宝田院とともに与えたとされる。 中央に南無不可思議光如来の九字の尊号を配し、左下隅に「福命尽十万無量光如来」の十字尊号、右下隅に「唐無阿弥陀仏の六字真号を配し、報道、慈陀の二尊像を描いている。そして右に天竺(てんじく)震旦(じんだん)の十萬の像を、左に和朝の像を描す。その下部に聖德大師像を加えている。光明本尊は東日本には多く、西日本には少ない貴重な資料である。 福善寺は天正元年(1573)行楽法師が開いた浄土真宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色春日曼荼羅	けんぱんちやくしょくかすがまだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹本着色、輸装	縦99cm、横36.4cm	曼荼羅には、儀軌(ぎき)によって密教の根本理を引き出したものと、特殊な尊像を中心にその曼荼羅が効果ありと信じられた加持祈福の際に奉持(ほうせい)される別尊曼荼羅がある。 本品は春日能乐茶羅(かみどりのうがくぢやら)と称される別尊曼荼羅のひとつで、上方に通山を描き、中央に本地仏を下方に春日大社の御意(おんじ)と呼ばれる神鹿の立つ姿を描いている。密教も少く保存も良好な室町時代(1333~1572)の作である。		
県	重要文化財(絵画)	刺繡阿弥陀三尊種子曼荼羅	しじゅうしゃかさんぞんしゅじまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹糸刺繡、輸装	縦73cm、横27.5cm	華色絨糸で上方に天蓋を刺繡し、中央の三個の円光の中の蓮座に、毛髪を刺繡した種字がのる。その下には三層の円机上に火舎、花瓶を刺繡で描き、三尊重を記形をあらわしている。蓮座運弁の糸は、筆觸(うかづき)の色と頭(かしら)の色で、頭(かしら)は白い美麗である。表装中継(のこぎ)の上方には叙事、下方には達泡を織った豪華なもので、刺繡技工を知るうえに貴重である。室町時代(1333~1572)の作。		
県	重要文化財(絵画)	絹本淡彩楊柳観音像(癡絕道冲の贊あり)	けんぱんちやくしょくようりゅうくわんのんそう	1幅	尾道市東土堂町	昭54.11.2	絹本白描淡彩、輸装	縦35.7cm、横18.4cm	古くから仏画の画題として愛好され、種々の病理の消除を本誓とするという様御觀音を描いたもので、小幡ではあるが、繊細流麗な墨線は後の隠々にて生きており、特に宝冠の描寫は精緻である。寺伝によると牧翰(もくかん)筆といふ落款等もなく、確認の根拠をなしておらず、この画幅上部の府絶道冲(ぎぜつとうちゅう)の贊によれば、南宋時代(12~13世紀)のいた画工の手による作品であることはなはず。 なお、贊者痴絕道冲(ぎぜつとうちゅう)は、淳祐1年(1250)に死去しているから、この作品は13世紀半ば以前のものと思われる。 光明寺は南北朝時代初期(14世紀前半)、足利尊氏の従軍僧によって天台宗から淨土宗に改宗したと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地蔵菩薩十王像	けんぱんちやくしょくじぞうぼさつじゅうおうぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭55.6.24	絹本着色、輸装	縦94.3cm、横86.0cm	嘉靖41年(1562)朝鮮半島で描かれた仏画で、李朝鮮の国王や王妃等の奉身長久と國土の安泰、人民の安寧、仏法興隆を願て、清平山人が描いたもの。この十王像一面を描き清平寺に安置して香をとき、更にその功德を一切衆生に及ぼさんことを祈念したものと記す。 中央に地蔵菩薩、その両邊に仏法を守護し死者を裁く十王を描く。 光明寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色如意輪観音像	けんぱんちやくしょくにのいりんくわんのんそう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		南北朝時代の建武元年(1334)の作で、図の右下に墨書銘が見える。寺伝では足利尊氏が寄進したという。 六臂(ひ)の如意輪観音を墨線で描き、彩色はほとんどない。水墨画的な淡彩の画像が鎌倉時代末期から室町時代(1333~1572)へかけて出始め、それは仏画本来の礼拝の対象としてのものから鑑賞的な圖へと移ることを意味するものと言われる。本圖像は、上記のような絵画史的な見解とその記年銘がほぼ一致する点からみて、貴重な資料であると考える。 如意輪観音は、変化観音の一つで、如意とは如意宝珠、輪とは法輪を意味し、それらの功德によって衆生の苦を抜き、樂を與える観音である。像形には二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂等があるが、六臂の例が多く流布しており、その最も著名な例としては、大阪・般若寺の如意輪観音坐像があげられる。			

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色千手観音像	けんぱんちゃくしきせんじゅかんの んそう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦171cm、横82cm	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。絵画的な観点からは、画面下方の濃褐色の岩、上方の濃紺の岩山や虚空、そして暗いバックを背景として、周囲に二十八部衆を從えて中央に大きく金色の千手観音像、上方に同じ金色の五觀音が浮かび上がる様子が鮮やかで表現されているのが特徴である。千手観音のやわらかな顔面でさうな表情に元来現(14世紀)の画法の影響が見られるところである。光背(ごへい)の線模様にも見られるように細緻な表現がよくなされており、六觀音を一回であらわす特異な構成に注目すべきところである。 千手観音は四十本の手を持ち、舟形光背をもつて描かれている。 画面向かって左下に「備後國尾道浦」、右下に「淨土寺常住」の墨書きが認められ、本画像が淨土寺伝來の什物であることが明らかである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色淨土曼荼羅	けんぱんちゃくしきょくじょうどまんだら	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦128cm、横128cm	鎌倉時代末期(14世紀)の作で、もの袖木の銘によると寛元元年(1243)作、正慶2年(1333)修理と伝えられる。阿弥陀三尊を中心とした大仏堂を描いた絵巻浄土の情景を描いたもので、当麻曼荼羅と呼ばれる形態の図の一つである。左右および下端にはイダイケ夫人が阿弥陀如来に帰依する物語や十六觀想図などが描かれている。 絹地に三幅に継いであり、普通は縦繋ぎであるのと異なる。このような横繋ぎは幅広い画面の場合に見られる。また、画面右端の上端辺の風景描写が日本的な風になってしまい、中央の阿弥陀三尊は、仏身は金泥で、衣文は切金が用いられている。 廿日市市蒲生寺蔵の淨土曼荼羅(当麻曼荼羅形式)に次ぐ鎌倉時代末期の、本県では少ない遺例と言える。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仁王經曼荼羅	けんぱんちゃくしきょくじょうどまんだら	1張	尾道市東久保町	昭62.3.30	絹本着色、軸装	縦161cm、横128.5cm	鎌倉時代中期(13世紀)の作。方形の三区画に分けられ、中央に不動明王、周囲に四大明王や四天王などを描いている。 仁王經曼荼羅とは、國家・人民の安寧を目的とする仁王經法という修法の本尊である。災厄、増益、敬愛、護伏(ちうふく)など四種の修法を行なう際に懸けられていた。 この図は災厄法用で、山口県神上寺に伝わる図の原本を写したものと考えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦八相圖	けんぱんちゃくしきょくしゃかはっそう す	8幅	尾道市西土堂町	平83.18	絹本着色、 三幅一鋪 第一幅「託胎」、第二幅「降誕」、第三幅 「試芸」、第四幅「出家」、第五幅「半度 叉」、第六幅「降魔」、第七幅「訖法輪」、第 八幅「涅槃」	第一幅／縦114.0cm、横 119.5cm 第二幅／縦112.1cm、横 120.1cm 第三幅／縦111.8cm、横 119.4cm 第四幅／縦113.6cm、横 119.0cm 第五幅／縦113.5cm、横 120.4cm 第六幅／縦112.6cm、横 118.1cm 第七幅／縦113.1cm、横 119.4cm 第八幅／縦112.2cm、横 119.8cm	持光寺の八相図には、第一幅から順に「託胎(たくたい)」「降誕(こうたん)」「試芸(しけい)」「出家(しゅっけい)」「半度叉(ろうだしづ)」「降魔(こうま)」「訖法輪(てんぱりん)」「涅槃(ねはん)」の場面が描かれています。各幅に事蹟5段落、30余りの事蹟が描かれています。 この八相図は、微妙な筆(さき)によって立体感を表し、繊細な色使いが施され、わが国中世の優れた大画面式の釈迦八相図は、これをおもて6例しかなく、中世に描かれた八相図八幅本の中で、完存している唯一の事例である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色伝足利尊氏像	けんぱんちゃくしきよんでんあしか かたかうじうそ	1幅	尾道市東久保町	平28.3.28	絹本着色、一幅一鋪、軸装	縦107.0cm、横56.7cm	画面中央部に、束帶姿で高麗経(こうらいき)の上げ座に坐す人物像を描く。人物の容貌は穎やかな印象に整えられており、その描写には似絵的な特徴が見られる。着している僧衣(そうい)は足利将軍家も家紋に用いた五七桐(ごしちゆう)の紋が一面に散らされている。 本画像は、足利尊氏の深い関係があつた淨土寺に奉じて伝來した肖像画である。画賛や花押、奉納文書などなく、像衣は未詳であるが、足利将軍家との関わりをうかがわせる因縁などや高い技量と身に着けた中央執筆の手による制作と見られる出来映えは、広島県内の中世に遡る数少ない武人肖像画の中でも大変貴重である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぱんちゃくしきょくぶねはん ず	1幅	尾道市西土堂町	平28.10.27	絹本着色、六幅一鋪、軸装	本紙縦202.9cm、横154.3cm	仏涅槃図は釈迦の臨終の最期を描く仏画である。持光寺に伝わるこの涅槃図は、沙羅(さら)双樹(そうじゅ)の下、宝(ほう)台(だい)上に横たわる釈迦を中心に、それを取り巻く会衆(かいしゅう)や動物が卓越した筆致・画風によって描かれている。 本図は、旧裏打(うりだ)の名文によると、弘安7年(1284)に画師(くわいしゃ)若狭(わかさ)によつて描かれ、江戸時代中期まで3度の修理が行われたと伝わる。後補箋所が多いものの、本図の主要部である釈迦と周囲の会衆の表現はほぼ作成当初の状態をとどめている。 制作年代が鎌倉時代に遡る涅槃図の遺例が少ないので、本図は制作優秀であるとともに、度重なる修理を経ながら大切に使用され、受け継がれてきた歴史的価値を有することから、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造文殊菩薩座像	もくぞうもんじゅばつざそう	1躯	尾道市東久保町	昭29.9.29	寄木造、彩色	像高63cm	背に頭光身光を負い、右手に宝劍、左手に經巻を持ち、獅子の背上の蓮華座に半跏(はんか)坐している。金糸まきい眼光普々たる顔は、文殊菩薩に比べて大ぶりに造られ、南北朝時代(1333~1392)の作とされる。なお、本像は納める獅子の床板に、南都津波磨(つばみ)舟井(ふねい)仏所で造像され、永和4年(1378)4月4日に安置された旨の墨書きが見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざそう	1躯	尾道市東久保町	昭37.7.20	寄木造、漆箔	像高88cm、膝張72cm	浄土寺阿弥陀堂の本尊で、紙木墨書定説(じょうしよく)起説文(きしょもん)(重要文化財)に記されている像と指定され、脇侍の観音菩薩・勢至(せいし)菩薩とともに内陣に安置されている。 寺伝では定期作と伝えが、定期作を忠実に踏襲した仏師による平安時代末期(12世紀)の作と考えられる。		開運施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造仏殿様厨子	もくぞうぶつでんようしき	1基	尾道市向島町	昭46.4.30	桁行26cm、梁間17cm、棟高(基壇とも) 73cm、木造漆塗		本品は、工芸品であるとともに、和様を一部に交えた禅宗様の宮町時代(1333~1572)の仏殿建築を彷彿しており、多少の欠損(けつさん)の割合はあるが、小さな作品であるにもかかわらず、細部に完璧な時代の特色を示しており、この種のものとしては珍らしい秀逸な作品である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造地蔵菩薩坐像	もくぞうじぞうばさつざぞう	1躯	尾道市御調町今田	昭50.9.19	寄木造、臼形二重蓮座	像高41cm、膝張34cm、光背の径29.1cm、台座の高さ23cm	円頂で眉間に白毫をあらし、半眼に閉いた眼は木彫で、首には三道がある。通肩(つうけん)にかけた法衣及び身釈は金色で、衣には唐草や実物を描き、その彫法は写実的で流麗である。胸には透影(すかしほり)金具の模様をかけている。右掌には当初の鶴杖(しゃくじょう)をもち、左掌には宝珠をかけていたと思われるが今は欠失している。台座、光背(こうはい)とともに当初のもので、室町時代(1333～1572)の作である。 ※白毫(びけい)…私の髪を表す三十二面相の一つで私の眉間にあって光明を放つされる。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造特國天立像	もくぞうじこくてんりゅうぞう	1躯	尾道市御調町下山田	昭50.9.19	寄木造(頭部・胴体は一枚彫成)	高さ40.5cm	寄木造ではあるが、頭部と胴体は一枚彫成した小像である。鎧を着け右手を肩の上まで上げて鉾(ほこ)を持ち、左手は腰においている。肩裂(かたり)及び帶布を着け、腰の両側から絆(ひれ)ぎぬを垂らしており、または彩色されていたと思われる痕跡があるが、今はほとんど剥落している。衣文の彫りは深く立体感に富んでおり、頭部の前立(まえだて)を造り、頭髪を束ねて五眼をはじめ、口を強く結んだ気力にあふれる相の像である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	木造一鎮上人坐像	もくぞういつちんしょうにんざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭54.11.2	寄木造、乾漆、玉眼	像高80cm、膝張82cm	時宗の寺院である西郷寺の開基と伝えられる六代遊行(ゆぎょう)上人一鏡の坐像である。この像は非常に写実味豊かで、頭部・顔面の筋骨や肉付けが巧みに表現されており、頭面・両手の皮膚色・脣の赤色等の彩色に富んでおり、像の仕上げは、木彫の上に麻布を貼り墨を塗布する方法を二度くり返し、像全体に程やかさを添わせる工夫がなされており、作者は不詳ながら、その確かな技術がうかがえる。南北朝時代(1333～1392)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	金銅阿弥陀如来及び両脇侍立像	こんどうあみだにょらいあよりょうきょうじりゅうぞう	3躯	尾道市東土堂町	昭55.6.24			中尊阿弥陀如来立像／全長57cm、宝身49cm、台座9cm、脇侍親世菩薩立像／全長39cm、宝身31cm、台座7.5cm、脇侍勢至菩薩立像／全長38cm、宝身31cm、台座7cm 鎌倉時代(1192～1332)以降、全国的にその造立信仰が流行した。信濃国長野の善光寺(ぜんこうじ)の本尊を模したと称せられている「善光寺如来」の一作例である。本来あたはすの「一光三尊」の板光背(いたひ)を廃除しているのは惜しいが、室町時代(1333～1572)のすぐれた造品である。中尊の両手とも刀印(とういん)のあるはすするらしい。東日本多く西日本に比較的少ないと從来いわれてきた善光寺如来像の分布に、新しい例を加えるものである。光明寺(ひみつ)に住職融印(ゆういん)。文明元年(1469)善光寺本尊を寫した本尊を、大永2年(1522)同じく融印が開創した寺頭源(てうげん)に安置したものとい。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 金剛界 附台座	もくぞうだいにちじょらいざぞう こんごうかいつけたり だいざ	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造	像高78.5cm、膝張60.0cm、台座高43.0cm	いわゆる智拳(ちくわん)印を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の金剛界大日如来である。本像は寺伝によれば、別件胎藏界大日如来坐像(県重要文化財)とともに浄土寺末寺の極楽寺の本尊であったと伝えられる。面部の影口は穏和で、また着衣の衣文の彫りよりも浅く、像底から内割り(うちわり)が施されており、内割りは大きめなど平安時代(794～1191)の特徴がよく出ている。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 胎藏界 附光背	もくぞうだいにちじょらいざぞう たいぞうかいつけたり こうはい	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造、舟形板光背	像高90.0cm、膝張68.0cm、台座高118.0cm	法界定印(ほうけいじんいん)を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の胎藏界大日如来である。検材木造である。頭頂には余白が多い宝冠(ほけん)があるが、これは別造で地盤部に矧(は)さぎ合はず。金剛界の像とは彫技や製作技法も異なり、別人の作とみられるが、胎・藏二界の大日如来が遺存することは珍しく、平安時代(794～1191)の作のこととあいまって重要な作例と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、金泥彩漆箔	像高139.0cm、裾張34.0cm	頭頂から足下、腕手、螺巒金具、表面彩色等、細部まですべて当時のまま残っており、その保存状態はきわめて良好である。作風は、細部まで非常に丁寧な作りで、優れた技術をもった仏師の作と思われる。光背(こうはい)、台座も同時代のものと思われる貴重な仏像である。鎌倉時代中期(13世紀中頃)の作である。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造真教上人坐像	もくぞうしんきょうじょうにんざぞう	1躯	尾道市西久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、彩色	像高82.0cm、肩張48.0cm、膝張74.0cm、面長18.0cm、面幅16.0cm	時宗の開祖一澤上人の高弟「真教」の僧形坐像である。白衣の上に墨染めの衣を着し、袈裟を結いた姿を写実的に彫り出している。一澤の死後、教団として実質的に組織化した真教上人の数少ない彫像であり、貴重なものである。 製作年代は鎌倉時代後期または南北朝時代(14世紀)と推定される。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	平28.10.27	検材、寄木造、差し草、玉眼嵌入、白毫水晶(新補)嵌入、肉髻球(後補)嵌入、着衣全體に敷金・盛り上げ彩色	像高:130.9cm	常称寺本堂木暮である本像は、頭輪部の「ラジカルがよく整えられている」とともに、流麗な衣文(えもん)が的確に形成され、着衣全體には精緻な文様が載(き)り金(かね)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており、これらは当時の状態でほぼ完全に残っている。 本像は、平成24年度の保存修理の際、足軽(あしき)その銘文から、正中2年(1325)に仏師美作(みまさか)が法橋(ほっこう)家(うえ)のぞう(うえ)に作成されたと想定される。 本像は、数少ない時宗(じしゅう)寺院の遺構である本堂本尊として制作年次などが分からずに加えて、制作優秀で、特に着衣全体の精緻な装飾が当時の状態でほぼ完全に残っている遺例がほとんどないこれからも、貴重である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造五劫思惟阿弥陀如来坐像	もくそうごこうしいあみだにょらいざそう	1躯	尾道市西土堂町	平28.10.27	檜材か、寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入、肉髻珠(後補)貼付	像高:112.0cm	五劫思惟阿弥陀如来像は、五劫という長い時間思惟にかけ、理髪をしなかつたために長大な頭髪となつたことを表す大きく膨らんだ頭部が特徴である。持光寺本尊本算である。本像は、風格の大きな影響のバランス、ふくらみであるが目鼻立ちのすっきりとした面部の表現、整えられた衣文表現などに優れた造形感覚が認められる。当寺の古記録によると、本像は元治15年(1702)に仏師(ぶっし)法橋(ほっきょう)安(あん)清(せい)により造像されたと記されている。江戸時代以前の木造彫像の五劫思惟阿弥陀如来像は全国的にほとんど遺例がない中で、本像は彫技の確度あり、達形的に優れているだけでなく、制作年代や作者などの由縁が分かるものとして、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来及び兩脇侍立像 附 聰音菩薩像内納入品 阿弥陀如来印仏 十五枚 勢至菩薩像内納入品 阿弥陀如来印仏 包紙添 十一枚 内一枚に弘安八年二月の記がある 阿弥陀如来像内納入品(追納) 一、台座光背寄進状 包紙添 一通 一、位牌 一柱	もくそうあみだにょらいおよびりょうきょうじゅううそう	3躯	尾道市東久保町	令和元年(2019)10月21日	檜材、寄木造、金泥塗り、截金、玉眼嵌入	阿弥陀如来立像(中央) 像高:98.9cm、脇侍立像(左) 像高:91.8cm、脇侍立像(右) 像高:91.8cm 勢至菩薩立像(左脇侍) 像高:66.3cm、脇侍立像(右脇侍) 像高:66.4cm、脇侍立像(右脇侍) 像高:55.7cm	本三尊像は、時宗寺・西郷寺の本堂本尊で、阿弥陀如来像を中心として、前後の聰音菩薩像と勢至菩薩像を脇侍する。末迦梨陀(阿弥陀三尊像)でもある。精神性、菩薩性。阿弥陀如来像は、ふよかな顔立ちで、頭部は膨らんでいて、身体は細めで、立派な威儀のある像形を持つ。両脇侍は、聰音菩薩立像(左脇侍)、勢至菩薩立像(右脇侍)の2体で、細い頭部を組み合せていて、輪郭線が細く、輪郭線から出され、絵面には律動感がある。いずれも仏師の優れた造形感覚(高い技術)を誇る事ができる。 平成25~26年の保存修理の際、両脇侍像の像内から印仏が発見され、その中に弘安8年(1285)の年紀が確認された。印入品は弘安8年(1285)の年紀で、本三尊像は同年に制作されたと考えられるに至った。以上より、本三尊像は、制作優秀であることに、年代の明かな来迎形阿弥陀三尊像の基準像に位置付けられる。本県の彫刻史上特に重要な作品であると評価できる。 また、印仏を始めてする納入品。木本三尊像の由緒、伝承を示す重要な資料である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製銘口	どうせいかにぐち	1口	尾道市東久保町	昭29.9.29	銅製	直径37cm、重量15kg	銘口は、錚鼓(しょうこ)を二つ合せた形に似て、神社仮闇の軒先に懸けてあり、前面に経(かね)の縁という布縁を垂らし、参詣人はこの縁を手に持ち、振って鼓面を打ち札拂するもので、木本も淨土寺本堂(国宝)の正面に懸けられている。刻銘があり、貞和5年(1349)作であることが分かる。 「備後國尾道淨土寺觀音堂也」貞和五年己丑卯月十八日大工阿部房綱」		関連施設:淨土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	金銅蓮花輪宝文置脱相箱	こんどうれんげりんばんぼうもんおきせっそうはこ	1合	尾道市東土堂町	昭36.4.18		縦39cm、横36cm、高さ12cm	長方形の箱で、裏板が脱教の原稿などを入れる。 木製墨塗漆地に周囲に金銅の蓮華(れんげ)文や輪宝(りんぽう)文などの金具を置き、ふちに唐草文を浮彫りにした帶板を金具を貼り、上げ底の脚部は金銅板裏輪(ふりりん)を施した格狭間(こうさま)を透かす。製作の年時は「慶長第三戊戌(朱漆書の銘)」すなわち慶長3年(1598)で、手法と様式は安土桃山時代(1573~1602)の特徴を示している。		
県	重要文化財(工芸品)	白紫絆糸紋腹巻 附 兜眉庇	しろむらさきひいとだんおどしほらまき	1領	尾道市因島中庄町宇寺 追金蓮寺内	昭36.11.1		高さ53cm、胴回り72cm	腹巻は、背中引合せ形式の初期のものは袖も兜もない軽武装用の鎧で、鎌倉時代末頃(14世紀前半)発生したと思われる。その後、室町時代(1333~1572)には大流行し、背中の引き合せ部分に背板をつけ、更に袖をつけるも具備するようになる。 本品はそのような室町時代末期の腹巻と思われる。小札を紫・緋・白糸で段々に威(おど)した、美しく軽快な姿の腹巻である。 伝承によると因島村上家九代の新蔵人吉充が、小早川隆景より賜領したといい、村上家に代々伝えられたものである。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄製燈籠	てっせいとうろう	2基	尾道市東久保町	昭37.7.20	鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもの。	高さ37cm、幅28.5cm	もと淨土寺利生塔(りょうじょうとう)にあったと伝えられる一对の燈籠。春日厨子の形を取る。鉄製の屋蓋や柱を組み合せたもので、軒ぞりを美化するため、かや負いの中央に折れを作ることなく、時代の建築の特徴をよく反映する。屋根の上面には三结合起来のかかづを二つ並べるが、ひりひに連子(れんじ)に菱形をささんで欄間、きびきびしたくり形の格狭間(こうさま)などは南北朝時代初期(14世紀前半)ごろの様式をよく示している。		関連施設:淨土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	木造厨子 木造厨子台(旧太子堂安置) 1基	もくそうし もくそうししたい	3基	尾道市東久保町	昭37.7.20	春日厨子 大(高さ1.6m)中(高さ1.3m)、 小(残欠) 厨子台 幅2.7m、奥行1.28m、高さ32cm		3基の厨子は春日厨子で、それぞれ聖德太子像(重要文化財)を納めていたものである。 厨子の台は、重ね菱の文様を連子の中にさし出した手法は多宝塔須弥壇のそれと同じで、厨子とともに南北朝時代(1333~1392)ごろの作と推定される。台及び厨子とともに簡素なすっきりした秀作である。		関連施設:淨土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	尾道市東久保町	昭41.4.28	皮に墨で雲龍と鳳凰が描かれ、鉢ヒメ	径96cm、高さ88cm、胴回り301.5cm	胴内銘によると、正和5年(1316)に大工教通・友延により製作されたもので、皮に墨で雲龍と鳳凰がかかるており、紙留(ひよどり)である。また、皮の張り替えは、延元元年(1336)・延文4年(1359)・応永6年(1399)・応永34年(1427)・元和4年(1618)の回りあり、何年で張り替えたかがわかつ、歴史的資料としては珍しい。		関連施設:淨土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	銅製地蔵菩薩慧仙	どうせいじぞうぼさつかげほとけ	1面	尾道市瀬戸田町御寺	昭62.3.30	浮彫、半肉彫、毛彫	径24.2cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。円形銅板上中央に宝珠と錫杖(しゃくじょう)とをもつ地蔵菩薩が蓮台上に坐し、頭光身光を負う姿に表されている。地蔵と蓮台は、一枚の銅板を楕円形に起して薄肉に押出して現わし、文衣蓮台などの細部は、よどみのない流れのような蹴影(しゃくじょう)で表現し、頭光・身光とともに円形銅板上に底止めされている。 慧仙は仏像などを金属などの円板上に作り出したもので、神社や寺院の内陣に懸けられていた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平52.25	和鐘、鐘座に蓮華文	総高93.5cm、口径59.5cm	戦国時代の天文24年(1555)製作の和鐘で、三原鉄物師の製作したものである。鐘座(つきざ)には蓮華文を鋲出している。 また、慶長の追銘には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の時に供出されようとした本鐘が、町家の寄附によって免れたことが刻してあり、天文天正間(1573~1591年)当時の和鐘様式を良く伝えているのみならず、向上寺自体の歴史を語る資料としても貴重である。 向上寺は臨済宗仏道寺の大通禅師の開山になる寺で、瀬戸田水道北口に位置する。国宝三重塔があることでも著名である。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製有頸五輪塔形舍利塔	こんどうせいやううけいごんとうがたしゃりとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺(福山市西町二丁目、広島県立歴史博物館寄託)	平8.9.30	銅造、鍍金	総高8.45cm、舍利容器高2.2cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半~14世紀前半)にかけて製作された舍利容器である。通常の五輪塔と異なり、火輪や火輪の間に円筒状の部分が作られており、むろん宝塔を意識したデザインと言える。火輪の内部に舍利を納める円筒とその蓋がある。蓮華座など各所に細かな細工が施され、洗練された美しさを感じせる。 光明坊は鎌倉時代以来の古刹であり、西大寺流傳宗の影響が伝わる。		関連施設:広島県立歴史博物館(086-931-2513)
県	重要文化財(工芸品)	金銅火焰宝珠形舍利容器	こんどうかえんほうじゅがたしゃりようき	1基	尾道市東久保町	H26.2.27		総高 14.2cm、基壇径 5.6cm、独鉢径(高さ)4.6cm、輪宝径 4.3cm、輪中央穴外径 4.0cm×0.6cm、蓮華座高 4.4cm、宝珠(高)3.9cm(底)3.2cm、火焰最大幅 5.6cm	当該舍利容器は、下から、台座、輪宝(りんばう)及び宝珠から成る。 台座は、六方隅入の円形の基壇の上に反花座(かぶせざ)があり、その上に独鉢(とこしょく)が立ちれる。独鉢の上部には輪宝と宝珠を組合する様子となる。 輪宝は、中央部に独鉢の先が入るように角い穴が設けられている。 輪宝は、蓮華座の上に載る方丈の火焰が開いている。蓮華座は、5段で各段8弁の計40弁の蓮弁から成る。輪宝の内側には白金や青色朱漆と帶たてた5段の舍利容器が納められている。いずれも水晶製と思われる。宝珠は水晶製で、それ以外の色の宝珠が確認される。宝珠は水晶製で、それ以外の色の宝珠が確認される。宝珠は水晶製で、それ以外の色の宝珠が確認される。		関連施設:淨土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き西國寺寄附帳	しほんぼくしょさいこくじきふちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書き、折本		南北朝時代末期から室町時代(14~16世紀)にかけて行われた西國寺の諸堂宇の建立再建に関する寄附を中心に記録したもの。巻頭の山名持豈(宗全、1404~1473)をはじめ山名氏一族や備後守護代・大槻満泰などの山名氏被官を中心に23名の名と寄進内容が記されている。「沼隈郡新庄者実秀」の名のみ。中世の富裕層の一端を見る所でもある。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き西國寺建立施主帳	しほんぼくしょさいこくじんりゆうせきじょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書き、折本	縦33cm、横122.4cm(八折り)	室町時代(1333~1572)の西國寺再建で施主となった人たちの署名帳である。筆跡の「征夷大將軍」は花押から見て足利6代将軍義教(1394~1441)と考えられ、次いで本願寺である西國寺の尊号(ゆうそく)僧正。次いで、細川持之、畠山持時、山名持豈、大内義興など、幕府の重臣や守護大名たちの名が見えてくる。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き西國寺不断經修行事及西國寺上錢帳	しほんぼくしょさいこくじんだんじよしうしょぎょうじよびさいこくじあげせんちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書き、折本	縦30.3cm、横702cm(52折)	戦国時代の文明3年(1471)6月16日、西國寺の不断経修行を再興するため、西國寺支配下の各方に上錢をさせた記録である。この一帖に書き上げられた各坊僧侶の数は197筆にのぼり、尾道をはじめ、吉舎・今高野山・御頭などの備後国内の者や備中薬王寺などの名が見える。 不断経修行は天元年(1108)慈円院追福のため始まったが、武家の領地押領のため中断していた。西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14~16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	版本大般若經附経櫃 3櫃 中箱 60箱	はんほんたいはんにゃきょう	600帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	版本、折本	縦26.3cm、横10cm程度	近江源氏の佐々木氏頼が康慶元年(1379)に開版した版本で撮った大般若經で、600帖を完備しているのは珍しい。経巻の奥書や経櫃の墨書きにより、応永9年(1402)6月に西國寺薬師堂(金堂)に施入されたことが記されている。 蓋裏墨書きは次のとおりである。 「寄進備後御領都頭尾道西國寺薬師堂 応永九年壬午六月八日勅主律師慶弁願主興賢」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き大般若經附経櫃 1櫃 中箱 18箱	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	112帖	尾道市西町末町	昭30.1.31	紙本墨書き、冊子、旋風葉(せんぶうよう)		平安時代の承安5年(1175)に藤原盛が三島大明神に施入した大般若經。全巻に施入の奥書がある。1行17文字で、界線は墨書きである。旋風葉(せんぶうよう)の表装を施したこの経巻は、全巻を同時期に書きしたものではないようで、奈良・平安時代初期(8世紀前半)の墨書きも見える。 天文22年(1553)に美原六村の子により八幡宮に寄進され、以来、薬師八幡神社に伝えられた。櫃の蓋裏に墨書きで寄進した旨が記されている。 「天文廿二年美井栗原之慈六村願主八幡宮御經五百内六百内住居正月十三日氏子請人」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き大般若經	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	2帖	尾道市美ノ郷町本郷	昭30.1.31	紙本墨書き、折本		平安時代の承久6年(1118)に明法生藤原季行が書寫した旨を記している。巻第百五十三及び巻第百五十四の二帖が伝えられる。各巻に奥書がある。1行17文字、界線は墨書きである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き西国寺塔婆勸進帳	しほんぼくしょさいこじとうばかんじんちょう	1巻	尾道市西久保町	昭31.3.30	紙本墨書き、巻子表	縦42.0cm、横255cm	室町時代の永享元年(1429)に有尊(ゆうそん)僧正が西国寺三重塔(重要文化財)の建立を発願した際、寄附を募るために趣旨を記した勸進帳である。西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14~16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書き因島村上家文書	しほんぼくしょいのしまむらかみけもんじょ	3巻	尾道市因島中庄町宇寺追(水軍城資料館寄託)	昭37.3.29	紙本墨書き、巻子表	第一巻長さ222.7cm、幅40.6cm、第二巻長さ374.6cm、幅40.6cm、第三巻長さ450cm、幅40.6cm	因島を中心とする中世因島関係文書、感状及び書簡など50通からなる因島村上家伝來の古文書群。鎌倉時代から戦国時代(12世紀末~16世紀)の毛利・小早川・川島のものであるが、すべてが因島村上家に關係するものではない。その開口について種々論議されているが、確たる説はない。いずれにしろ、因島に關係する因島及び瀬戸内海地域の状況をうかがう上で貴重な史料である。因島村上家はいわゆる三島村上家のひとつである。室町時代(1333~1572)以来因島や向島などを拠点に活動し、金蓮寺や中庄八幡宮などに因島村上家ゆかりの社殿も數多く見られる。後、小早川氏の水軍の一翼を担った。		
県	重要文化財(典籍)	金蓮寺在銘瓦 宝徳三年結縁衆の名を記す	こんれんじざいめいかわら	4巻	尾道市因島中庄町宇寺追 金蓮寺内	昭37.3.29	丸瓦・棟瓦、銘へら影刻	丸瓦縦32cm、横14cm、高さ7.6cm、棟瓦縦30cm、横29cm	因島村上吉資が薬師堂を建立した翌年の宝徳2年(1450)に御堂の上葺きのことを築(へらがき)した丸瓦と棟瓦である。屋根の瓦は手作製したもので、仕持快秀(かいしう)、大壇那吉地大炊助妙光(おおひらなかつよしあき)、瓦工尾岸直(おと)五郎経次などとともに、浦々の結縁合意者の名が列記されている。地妙光(ちめうこう)は俗名光明、村上吉資(むらかみよしざい)は吉資(よしそう)とい。また、伯耆大山の僧侶の名前も見られ、瀬戸内日本海の様子をうかがうことができる。 金蓮寺は、因島のほぼ中央にあり、因島村上家の菩提寺である。宝徳元年(1449)村上吉資が創建したと言うが、開基はそれ以前と思われる。		
県	重要文化財(典籍)	法華經版本	ほけきょうはんぎ	62枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	南北朝時代の応永2年(1395)9月から3年正月にかけて、僧行家の勧進により、淨土寺で開版された版木。広く俗人の理解をはかるため、経文に送り仮名や返り点を施しており(行家の刊記)。付則の版序は古い資料として貴重である。また、この版木は、応永5年(1398)重刊近江八幡神社蔵の後巻法華經と本文訓点が大体同じであり、播磨書写山の心室の校定版の一つと言われる。		開連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	梵網經版本	ぼんもうきょうはんぎ	6枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	室町時代の応永11年(1404)淨土寺で作られた版木。「備後国尾道浦於淨土寺開版応永十一年甲申の刊記があり、地方における印刷文化発達の事例として貴重である。 梵網經は世界後半に中国で成立したと推定されている経典。日本仏教でも尊重され、多くの注釈が作られた。		開連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	淨土寺文書	じょうどじもんじょ	104通	尾道市東久保町	昭41.4.28	紙本墨書き		鎌倉時代末期から室町時代(14~16世紀)にかけての文書類である。淨土寺が、天皇家はじめ足利将軍家、管領、守護代などと密接な關係を保ちながらその信仰を集めるとともに、寺領在園の維持に努めてきたもの時代の移動を語る資料類である。 これらの大別すると1.信仰關係、2.皇室・足利氏以下諸豪族から莊園までに纏められた文書類である。寺内にあった利生塔の所蔵棚田村(双三郡若田村)の百姓等が、武家代官に対する年貢拒否を申し合わせた連署請願文のような、庶民の動きを示す文書も含まれている。		開連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥大乗十法經	こんしきんぎんでいたいじょうじっぽうきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長1.012cm、幅25.7cm	紺紙十八紙を継いで作られた経巻で、巻頭表には金泥をもって宝相華(ほうそうけ)唐草文様に題讃を描いて「大乗十法經一巻」の経題を書いている。見返しには、釈迦が宝樹の下で大衆説法をしている図を描いた表書きをつけている。本文は「仏教大乗十法經」から書き始め、金銀泥で全巻の間に金銀一行ずつ文互に書き下す文書きで記され、流麗な楷書で書かれた装飾経で、奥書きはないが平安時代(794~1191)の作である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥無量義經	こんしきんぎんでいりょうぎきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長846cm、幅25.6cm	紺紙十七紙を継いで作られた経巻で、巻頭に見返し経があつと思われるが、ほとんど欠失してその残部を行ずかに残っているのである。巻頭には金泥の御印(ごいん)と密接な關係をつけ、その奥側の金網(84x3cm)(はうかた)金具は先存しており、魚々子(うおうこ)の表書き(ほうぞく)文様を施す。裏面には二人の僧が対座し、外には数人の僧がいる様子が描かれている。杉製の軸の両端には金網(84x3cm)(はうかた)金具をはめ、魚々子(うおうこ)の宝相華文様を描いている。本文は「大[84a]盧遮那成仏變加持經世間成就品第五」から書き始め、金銀泥で書かれた装飾経である。奥書きはないが平安時代(794~1191)の装飾経である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大田比盧遮那成仏經卷第三	こんしきんでいたいびるしゃなじょうぶきょう かんだいさん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長802cm、幅25.8cm	紺紙十六紙を継いでおり、紺紙の表には金泥で宝相華(ほうそうけ)文と「大[84a]盧遮那成仏經卷第三」の経題を書き、見返しには山水、家屋、蓮池を描き、屋内には二人の僧が対座し、外には数人の僧がいる様子が描かれている。杉製の軸の両端には金網(84x3cm)(はうかた)金具をはめ、魚々子(うおうこ)の宝相華文様を描いている。本文は「大[84a]盧遮那成仏變加持經世間成就品第五」から書き始め、金銀泥で書かれた装飾経である。奥書きはないが平安時代末期(12世紀後半)の作。		

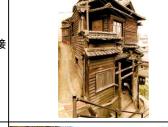
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	絹紙金泥大田比盧遮那成仏経巻第五	こんしきんでいだいびるしやなじょうぶつきょう かんだいさん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長900cm、幅26cm	紺紙十七紙を継いた経巻で、紺紙の表には金泥(きんねい)で宝相華(ほうそうげ)文様を描き、題葉に「大[84af]盧遮那成仏経巻第五」の經題を書き、裏表には毘盧山(びろさん)の駿遊説法の図を描いている。繪木は杉材で、両端に金銅輪形(こんどうりんぎょう)金具に魚子文(うなこぶみ)で宝相華文様を彫り出したものをつけている。本文は「大[84af]盧遮那成仏神変加持経巻第五」字輪点第10番から書き始め、銀糸の間に金泥をもって楷書で記した装飾経で、奥書きはないが、鎌倉時代初期(13世紀前半)の作。		
県	重要文化財(考古資料)	貝ケ原遺跡出土の特殊器台形土器	かいがはらいせきしづとのとくしきだいがたどき	1点	尾道市御調町市 御調町教育委員会	昭62.12.21		現高68.5cm、胸部最大径41.1cm、脇部最大径23cm	この特殊器台形土器は、昭和43年(1968)御調町貝ケ原に位置する御調川沿いの左岸丘陵の土取り工事中に出土したものである。特殊器台形土器は、特殊壺形土器とともに、改生時代中期の中頃(1世紀後)に、吉備(岡山県・広島県東部)を中心とした墳墓から出土する。集落遺跡から出土する日常使用される器台や壺に比べて、極めて大型化すること、赤色顔料が表面全体に塗られることなど点で大きく相違し、墳墓の葬送に關わる土器と考えられている。本例は特殊器台形土器の中では古式の様相を示すものであるとともに、吉備の中枢(岡山県南部)においてもこのような完存に近いものはなく、極めて貴重な資料の一つといえる。		
県	史跡	太田貝塚	おおたかいづか		尾道市高須町字出口、同字竹之端	昭24.8.12 昭48.12.18(一部解除)	縄文時代前期～後期(約6000～3000年前)		松永海岸の標高約3mの微高地に位置し、かつては直轄海浜に廻っていた縄文時代(約12000～2300年前)の貝塚である。古くから多くの人骨を出土して有名であるが、その所属時期はたしかない。縄文時代の遺物としては、前期、中期、後期の土器があり、前期土器は貝層下の有機砂層に含まれる。土器のほか多量の石器(せきそく)、石砲(せきぱう)、石錐(せきつい)やハガイ・アカギ・アサなどの貝類、獸骨などが出土し、狩獵・漁撈の生活を物語っている。なお昭39年(1964)の調査では、遺跡の東半部に幅2.6m、深さ0.85mの溝状遺構が南北にわざつて挖出され、多量の古式土師器や埴塗土器が出土した。現在、貝塚の一部は史跡公園として活用されている。		
県	史跡	因島村上氏の城跡 長崎城跡 青木城跡 青陰城跡	いのしまむらかみしのしあと (ながさきじゅうあと、あおきじゅうあと、あおかげじゅうあと)		尾道市因島土生町 尾道市因島中井町 尾道市因島中庄町・田熊町	昭32.9.30			中世瀬戸内海中央に勢威をふるった因島村上氏の主要な城跡群である。因島の南端にある長崎城跡は、村上氏の城跡(ひらただい)方面に対するもので最初の拠点と考えられるが、現在、日立造船敷地内にあり、遺構はほとんど失われている。島の北側にある青木城跡と向島の余崎城と共に布刈(めり)瀬戸を見張る城として利用され、標高50mの本丸を中心に東の大手に向かって郭が連なる。なお、城壁には石垣、表木戸の地名を伝える。島の中段の青陰城跡は、標高275mの山頂に位置し各要害を扼守する拠点になっていたと思われる。三の丸を西端に、東・表郭が並んで城跡である。城壁には入手・表木戸・陣屋・水落などの地名を伝える。		開設施設:水軍城資料館 (0845-24-036)
県	史跡	鷲尾山城跡	わしおやまじょうあと		尾道市木之庄町木梨	昭52.3.4			建武3年(1336)、足利尊氏に従い九州大多良浜(たらはま)(博多)の戦いで戦功を立てた後藤の豪族原信平、為平兄弟が木梨(13)村を領めし。翌年木梨山に鷲尾山城を築いて以来250年間、木梨杉原氏の本城として城衆をみた山城の跡と伝えられる。東側の大木梨川および西側の谷川を天然の堀とし、標高320mの険しい山を利用してこの山城はよく保存されており、面積880mの本丸をはじめ二の丸・土塁跡・帯曲輪・出丸(馬場跡)および南側に4段と北西側に3段の曲輪が残っている。		
県	天然記念物	御寺のイブキヤクシン	みたらのいぶきひやくしん		尾道市瀬戸田町御寺字西郷	昭24.10.28			イブキヤクシンは針葉高木で、日本では主として青森県以南の大太平洋岸地域に自生するが、多くは庭園として栽培されている。本樹は県内有数のイブキヤクシンの巨樹である。樹高は16mで、主幹は地ぎわで東西の一大支柱にわかれ曲折しており、植物形態学上からみても価値の高いものである。なお、イブキヤクシンは、ヤクシンの別名である。		
県	天然記念物	山波良神社のウバメガシ	さんばうしとらじんじやのうばめがし		尾道市山波町	昭34.7.15			ウバメガシは、我が国南西部の海岸地帯と中国大陸の南東部に離散分布する常緑のカシである。本樹は、地上約15mで大小数多くの支柱幹に分かれ、さらに南方にやや離れて三支幹が地面から出ているので、現地では「指裏の裁縫」と謂えます。木束、單一の樹木であると考えられる。全国有数の巨樹である。本樹は指定時、海岸近くに位置していたが、その後、生垣環境の悪化により北方300mの尾道造船(株)構内へ移植された。		
県	天然記念物	垂水天満宮のウバメガシ群落	たるみてんまんぐのうばめがしぐんらく		尾道市瀬戸田町垂水	昭53.10.4			本群落は、生口島西側の龍甲山(海拔約30m)内にある天満神社(垂水天満宮)参道の兩側、南東及び南西斜面に発達している。樹高5～15mのアカガハが発生するが、ウバメガシが優占し、ほとんど純林の感がある。本群落は、群落の規模としてそれを凌駕し県内有数のものである。地上50cmの幹周が1mを超える大木も見られ、本地方の海岸急傾斜岩地に特有なウバメガシ天然林の面影を留めるものとして貴重な存在である。		
県	天然記念物	阿弥陀寺のビャクシン	あみだじのびゃくしん		尾道市向島町岩子島	昭53.10.4			本樹は、樹高約16m胸高幹周2.7mで、植栽されたものと思われるが、すでに県指定となっているビャクシンに比べて、直立性で、豊かに発達した枝葉が大きな広卵形の樹冠を形成し、樹勢も極めて旺盛である。かなりの巨樹である上、本種の生育形の一つを代表するものとして植物学的に価値が高い。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考	
県	天然記念物	仁野のナナノキ	にのななみのき		尾道市御調町仁野字岡田沖	昭59.1.23			ナナノキ(別名ナナメノキ)は関東地方以西の近畿、中国、四国及び九州の諸地方に生育し、中国にも分布するナシキモノ科の綱広葉高木である。南向きの緩斜面の畠地帯の中腹にある仁野谷音堂の境内にあり、樹高約17m、胸高幹囲2.64mを測り、県内最大級の規模である。			
県	天然記念物	艮神社のクスノキ群	うしらじんじゅのくのきぐん		尾道市長江1丁目	昭63.12.26			艮神社は千光寺山麓、海拔12~20mに位置している。境内には、拜殿の東方に1株(1)、社殿南側の附地内に並木台地01、2、4枚にそれを1株計4株(2、3、4)、合計4株のクスノキが大きな樹冠を広げている。それらの樹木の状況は次のようである。 (1)…神社の入口を入ってすぐ右側、拜殿の東前方に位置する最も大きい株である。主幹は地上2.7~3.2mの所で、太さで3支幹に分かれる。根元は石垣に接する。根元は石垣に接する。 (2)…南側附地台地の第1段、社殿脇ににある巨岩の横に生じ、樹幹がやや東に傾いている。 (3)…第2段にあり、樹幹はほぼ直立する。 (4)…最上段の北寄りにあり、(3)の株ほどんど同じ大きさである。			
県	天然記念物	鏡浦の花崗岩質岩脈	かがみうらのかこうがんしづかんみやく		尾道市因島鏡浦町宇小鏡	平17.4.18			鏡浦集落の北東端にある岬の突端から南に続く東海岸に見られる地質現象である。黒色の泥質岩(いしわらがね)類を主体とする堆積岩類中に、優白質の花崗岩質岩脈が、南北方向にほぼ水平に貫入している。岩脈の主脈部分は、北端では約2mの幅であるが、多少の彫刻を繰り返しながら、南に約120mにわたって連続している。主脈から分歧した支脈は複数の岩脈となる。露頭の北端から約40m南では、淡緑色のアーフィッシュグリーンの花崗岩質岩脈が約10mの範囲で南北に貫入している。以上のようならずから構成されるこの岩脈は、広島県青島の地質現象を代表する典型的なものである。干潮時には、海岸に沿て連続する露頭を詳細に観察することができる。			
県	無形民俗文化財	太鼓おどり	たいこおどり		尾道市吉和町	昭40.10.29			(注1)「花崗岩」とは、石英・長石を中心とする岩石で、ごま状に黒雲母が散在し、全体としては白みがかいたもので一般的。通称は黒影石といい、建築材や基礎などの石材として多用される。 (注2)「岩脈」とは、アマガが他の岩石の割れ目に差して侵入して、脈状につながっているもの。この露頭の花崗岩質岩脈は、約9000万年前~8000万年前の中生代白亜紀後期に形成された。 (注3)「泥質岩」とは、岩石や鉱物の粉から泥・粘土などの粒となり、堆積して固めて岩になったもの。この露頭の泥質岩類からなる堆積岩類は、中生代ユカ紀(約2億3000万年前~約1億3500万年前)に形成された。 (注4)「ランプロファイア」は、輝石・角閃石・黒雲母などの有色鉱物の割合が多い、濃色斑状の半深成岩。			
県	無形民俗文化財	みあがりおどり	みあがりおどり		尾道市御調町	昭41.4.28			豊年の予測される旧暦7月17日に、高御賀八幡神社に奉納されるおどりで、大太鼓と狂言(かわい)のはしゃぎあわせて踊る。この踊りは古くは「高御賀八幡奉納おどり」と言われており、「みあがり」の語源は足利尊氏と結びつけた「都あがり」より、むろし神への踊りを奉納するための「宮あがり」と思われ、古くから御調川沿いの各集落に伝えられ、農民の生活に密着したおどりである。おどり方、衣装、はやし方などから見て、豊年おどり、雨乞おどりなどの二・三の風流おどりをあわせたものと思われる。			
県	無形民俗文化財	名荷神楽	みょうがかぐら		尾道市瀬戸田町	昭43.4.27			名荷神楽は、とは荷神舞と称して、明治初年に4年一度の祭を伴う神社の式年の神事であった。ところが明治5年(1872)、太政官令により神職が耗費行事に限ることを禁じられたため、神楽から託宣を除き、民間人々によって二ニ神祇素神事として今まで承認されてきたものである。 演目の方、「聖魔祝い」「三宝荒神宮縛」(剣舞)、「王子」はよく形を伝えており、なかで「三宝荒神宮縛」は、赤の紙を着た人形に神酒を注ぎ、その色にじみ方で神意をうかがうもので託宣神事の一部を伝えるものと思われる。			
県	無形民俗文化財	小味の花おどり	こみのはなおどり		尾道市原田町	昭45.1.30			この踊りは、行基の開基と伝える摩訶衍寺(まかえんじ)の秘仏十一面觀音が、33ごとに開帳される時奉納される踊りである。この花おどりは、花をつけた笠をかぶつた數十人の若り子が、かん鼓、錚(かね)、笛にあわせて踊るものであるが、かつて花笠につけた花は、上組は牡丹、下組は桜、小味組は菊と、組によつて異なっていたといふ。 踊りは数多いが、そのなかで「糸屋踊」は太鼓20張を主体にした摩訶衍寺の法要に際して演ぜられるもの。雨乞おどりは、寺の上方の魔王をねた本地で踊られるので、雨乞おどりとのおれおどりである。			
県	無形民俗文化財	神楽	かぐら		尾道市御調町	昭46.12.23			この神楽は、「千芭舞」「悪魔払」「三恵比須」「折敷舞」などの舞によって構成されており、豈2枚の広さの中央で舞う場中神楽の大型を多く擁している。 その中の「折敷舞」というのは、神の御前用に用いる折敷を採用した舞で、もとは舞樂・劍舞・英蓋舞(ござまい)などと同じく、神楽の最初に舞われる儀式舞の一つであったが、明治初年にこの舞に趨向が加えられ、折敷のかわりに盆や刀身を持ち、それに多数の盃をのせて舞う舞となつた。なお、「三恵比須」などの狂言舞は古風な笑いを伝承しているものである。			

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	木ノ庄の狂太鼓おどり	きのしょうのかねたいこおどり		尾道市木ノ庄村	昭54.3.26			この「おどり」は、太鼓・大鉦（おおかね）・笛・カコ等を複数つづく木ノ庄市原の幣高八幡神社の秋祭に奉納するお祭りである。本来は、豊作の祈願される歲の夏に五穀豊饒を感謝して八幡神社に奉納する行事であったと思われるが、ち夏の虫送り行事ともなり更には旱天禱雨の際の雨乞いなどもあり今は盆ごろに行われるところから地元に關係の深田城主杉原氏の想豊おどりという意味も加えられた。		
県	無形民俗文化財	椋浦の法楽おどり	むくのうらのはうらくおどり		尾道市因島椋浦町	昭56.4.17			尾道市因島の椋浦町金蔵寺に勢揃いした「法楽おどり」の一団は、午後4時頃、一本の幡（ばん）を先頭として、町内の良（うじょ）神社に向かって進行する。この時刻は、最後に夕の引いた海岸でおどる時の汐加減のためである。 この「おどり」の起源は明らかでないが、地元の所伝によれば、中世ごろ因島を中心とした水軍が、出陣の時は椋浦で戰いの勝利と勝士の安全を行ひ、帰陣の際は中庄で勝利を祝ひとも重ねて、没者の追悼を行ったというが、その時の行事が「法楽おどり」の起源であるとい。特らしい装束に刀、甲冑の姿勢や跳ぶような動作、六字の名号に大縄などから、水軍に關係のあったことがうかがえる。		
県	無形民俗文化財	中庄神楽	なかのしょうかぐら		尾道市因島中庄村	昭57.2.23			毎年4月15日と10月15日に中庄八幡神社に奉納される神樂である。本神樂団には「昭和3年5月上旬」に宮地左近春光の書写した「神樂台本」が保存されており、記述によれば安政7年(1860)のものと推定される。 本神樂団はこの台本に記載された演目をすべて上演でき、荒神神楽の古型を保っている点で貴重である。 なお、本神樂と同じく「十二神祇」を称するのに、豊田郡瀬戸田町の生口島名荷の荒神神楽がある。		
国	登録有形文化財(建造物)	吉原家住宅表長屋門	よしはらけじゅうたくおもてながやもん	1棟	尾道市向島町	平9.7.15	木造平屋建、瓦葺、明治18年(1885)建設	建築面積114m ²	広大な屋敷構えを持つ農家の長屋門形式の表門である。明治時代の建築であるが、文政8年(1825)の家相図により、その時にあった門の規模・形式を継承したものと推定される。向島では類例が少ない長大な規模を持つ表門で、昔調べた記録もある。		
国	登録有形文化財(建造物)	白滝山莊(旧ファーナム住宅)	しらたきさんそう(きゅうふあーなむじゅうたく)	1棟	尾道市因島重井町伊浜	平11.10.14	木造一部鉄筋コンクリート造3階建、瓦葺、昭和6年(1931)頃建設	建築面積105m ²	白滝山莊は、因島市の北部にある靈山白滝山(標高226.9m、市指定史跡・名勝)の登山口に位置するアメリカ人宣教師の居宅で、斜面に建ち、1階を鉄筋コンクリート造、2・3階を木造とする。急傾斜斜面にドーマー窓を付けたハーフティンバー・スタイルの洋館で、ヴォーリズ建築事務所の作風の一端をよく伝えている。		
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺山門	こうさんじさんもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	鉄造、間口4.5m		耕三寺境内の北端にあって、伽藍中心軸上に位置する。往4本を立て、中央に開闊、両端に片開の扉を吊り、内袖は瓦葺とする。柱、扉ともに鉄製で、白色を基調に隨所に丹色を施し、扉にはさまざまな絵柄の装飾を施す。街路に面して境内のランドマークとなる建造物である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺中門	こうさんじちゅうもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造、瓦葺、間口3.6m		四間二戸の二重門で、入母屋造、木瓦葺。法隆寺の西院伽藍の中門を原型とするが、梁間は二間とし、各部に比例も異なる。組物等の装飾はおむね原型を踏襲しているが、飾金具、彩色などを多用し、壯麗な外観をしている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺羅漢堂	こうさんじらかんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			中門の両側に続く回廊状の建築で、内部に羅漢像を安置する。左右とも桁行17間、梁間1間の規模で、木瓦葺、切妻造とする。外壁面を連子窓、内側を枝拂。小屋は虹梁、双音組に化粧板根裏とする。中心伽藍のなかでは最も初期の建築である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺鐘楼	こうさんじしょうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			羅漢堂東側背面に建ち、鼓樓と同じ規模形式を持つ。桁行3間、梁間2間、入母屋造、木瓦葺で、白漆喰の袴腰を備える。新築舎寺鐘楼を模したもので、上部に高欄を持たない縁を張り出す。上層内部は中央部を吹抜けとし、両側に床を張る。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺鼓樓	こうさんじこうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積32m ²	羅漢堂西側背面に建ち、鐘楼と対をなす。鐘楼と同規模同形式で、細部装飾に至るまでほぼ完全に同一である。1階は4半数の土間とし、上層に高欄を設けない縁を出し、二手先の組物に二軒繁垂木、入母屋造、本瓦葺とする。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺仏宝蔵	こうさんじぶっぽうぞう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積83m ²	一連の伽藍からはや東寄りに建つ、桁行4間、梁間2間、平入、入母屋造、本瓦葺の宝蔵。内部は板敷きで一室とする。耕三寺の建築の中では比較的簡素で、新樂師寺本堂を模したとされるが、規模、各柱間に長押、蓮子窓を設ける外観など大きく異なる点が多い。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺法宝蔵	こうさんじほうほうぞう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積180m ²	伽藍中央に建つ宝物館で、佛宝蔵と対をなす。桁行4間、梁間3間の身舎四周に裳階を廻らす。屋根は入母屋造、本瓦の経葺とする。四天王寺金堂を模したといわれるが、法宝蔵は妻入りあり、屋根勾配、各部比例なども大きく異なる。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺僧宝蔵	こうさんじそうぼうぞう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積180m ²	伽藍中段東側に建ち、同型同規模の法宝蔵と五重塔をはさんで対をなす。四天王寺金堂を参考しつつ大きめ外觀を変え、身舎は円柱に二手先、裳階は角柱に平三斗とし、内部は折上格天井の大空間とする。昭和前期における大規模木造寺院建築の好例である。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺至心殿	こうさんじしんでん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積114m ²	伽藍最上段西側に建ち、信楽殿と対をなす。法界寺阿弥陀堂を模したと伝えられ、5間四方の身舎に吹き放しの裳階を設け、屋根は宝形造、銅板葺。組物は平三斗で、裳階の正面中央部のみ一段高く屋根を設ける。内部は一室とし、各種用途に活用されている。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺信楽殿	こうさんじしんぎょうでん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積104m ²	伽藍最上段の東側に建つ。至心殿とは対をなし、同規模同形式とするが、平面などに若干の違いがある。身舎柱は円柱、裳階柱は角柱で、講堂として用いられる身舎内部は一室とし、天井は折上格天井。四周外壁は蔀戸を見せるが、内部には壁が設けられている。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺本堂	こうさんじほんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積271m ²	中堂、左右翼廊、尾廊からなる堂宇。いずれも本瓦葺とし、輪部、壁面、建具に至るまで極彩色を施し、銅金具を用いる。平等院鳳凰堂を模しているが、細部においては異なる点も多く、内部外部とも仕麗さを増しており、耕三寺の中核建築として知られている。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺多宝塔	こうさんじたほうとう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造多宝塔、銅板葺	建築面積25m ²	本堂西方に建つ。石山寺多宝塔を模しており、下層は方3間の周囲に縁を廻らし、上層は円形平面で二手先組物で二軒繁垂木の軒を支え、屋根は上層下層とも銅板葺とする。比較的原作に忠実であり、組物に彩色を施した外觀は壯麗である。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺八角円堂	こうさんじはっかくえんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、瓦葺	建築面積71m ²	本堂を挟んで多宝塔と対置される。正八角形平面を持ち、屋根は宝形造、本瓦葺。法隆寺夢殿を模しているが、規模を縮小している。柱は八角柱で、組物は隅部出三斗、中備は平三斗、内部は板敷で、中央は鏡天井、周囲は格天井とする。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺銀龍閣	こうさんじぎんりゅうかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積40m ²	境内東方の庭園池泉に張り出して建つ、八尋大の板間の三方に縁を廻らし、東側に床と小室を設ける。屋根は宝形造の銅板葺。板間は鏡天井として龍の絵を描き、軸部はすべて銀色とする。板間の障子には花頭窓を設ける点も特徴的で、特異な意匠の建築である。		関連施設:耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺潮聲閣	こうさんじょうせいかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造及び鉄筋コンクリート造平屋一部2階建、瓦葺、車寄せ	建築面積389m ²	境内東北隅に建つ住宅建築。ポーチを持つRC2階建の洋館と、唐破風の玄関を持つ木造平屋建の和館からなり、洋館、和館玄関、老人室など各所に意匠を凝らす。洋館と和館を並立させる昭和初期の大規模住宅建築の特徴をよく伝える。		関連施設:耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	久山田貯水池堰堤	ひさやまだちょいすいちえんてい	1基	尾道市久山田町	平16.11.29	粗石モルタル積表面張石造 堤長75.0m 堤高22m 有効貯水量754,000t		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。市南西部を流れる門田川に建設された。中央に越流部を設けた堤長75m、堤高22mの石張コンクリート造堰堤で、堤体右岸寄りに半円状の取水塔を張り出す。平面形状は副堰堤との同心の円弧とし、重力式とアーチ式を複合した構造形式が特徴。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場着水井	ながえじょうすいじょうちやくすいせい	1井	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 長方形 面積5.0m ² 内法長さ4.2m 幅1.2m 深さ2.4m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。横ケ峰の頂を約12m掘り下げて築かれた尾道市創設水道の浄水池施設の一つ。水源地より自然流下により導水された原水を受ける施設で、鉄筋コンクリート造隔壁で内部を区切り、天端には花崗岩を配す。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場緩速ろ過池	ながえじょうすいじょうかんそくろかち	4池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 簾形454m ² 深さ2.4m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。着水井から導かれた水をろ過処理するための施設。外半径48m、内半径24m、中心角120°で、内部を隔壁により4分とし、扇形平面の鉄筋コンクリート造構造物で天端には花崗岩を配す。狭小地を巧みに利用した類例の少ない平面形状が特徴。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場配水池	ながえじょうすいじょうはいすいち	1池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 鉄筋コンクリート造り上屋計量室 内径27.0m 深さ3.0m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。ろ過池と同心の半径14mの円形鉄筋コンクリート構造物で内部は中央隔壁で2分される。池を中心部の円井で減菌水が注入されたら通水を、円形2条の導流壁に沿って蛇行させることで攪拌作用を高める。円井上方にはアーチコ風の平面12角形の上屋を設ける。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅主屋	きゅうふくいけじゅうたく(おのみちしぶんがくきねんしつ)しゅお	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積210m ²	尾道水道に臨む斜面に南面して建ち、寄棟造の東棟が大正元年、入母屋造の西棟が昭和2年築で、ほぼ中央の玄間に接して建つ。木造平屋建、桟瓦葺で、檜を中心にもんや鉄刀木(たがやさん)などの銘木を多用した上質な造りになり、瀧屋な敷奇屋風の意匠でまとめている。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅茶室	きゅうふくいけじゅうたく(おのみちしぶんがくきねんしつ)ちやしつ	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積28m ²	昭和3年築。主屋西棟の北西部に接続しており、尾道の近代における茶室趣味の有様の一端を物語っている。規模は小さいが、木造平屋建、桟瓦葺で、4畳半茶室に廊下を挟んで控えの間が付属した形式になっている。主屋と同じ良材を持ち、洗練された丁寧な造りである。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅蔵	きゅうふくいけじゅうたく(おのみちしぶんがくきねんしつ)くら	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	土蔵造2階建、瓦葺	建築面積25m ²	土蔵造2階建、南北棟の切妻造、妻入りで、蔵前が主屋西棟の北側に接続している。規模は桁行6m、梁間4m、屋根は桟瓦葺、外壁は漆喰塗で、1・2階境に蛇腹風の段をつけて水切り瓦を廻す。2階妻面には小庇付の窓を設ける。主屋と一緒に丁寧な造りになる。建築時期は主屋東棟とはほぼ同時期の大正元年ごろと考えられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	竹村家主屋	たけむらやしゅおく	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造2階建、瓦葺	建築面積481m ²	大正9年築。木造2階建、桂瓦葺で、北が道路、南が海に面している。全体は南北棟の北側に東西棟の南側が直交したT字型の形態で、竹材の細工や造作を多用した繊細な書院造である。北正面は棟違いの八椽造風に扱うなど、外観は重厚かつ豪放で、地域景観の核になっている。		
国	登録有形文化財(建造物)	竹村家門及び塀	たけむらやもんおよびへい	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造、瓦葺、間口2.4m、塀延長20.0m		大正9年築。門は北辺西寄りに設けられた切妻造、銅板葺の様門で、簡素な袖樋がつく。これに続く塀は、真壁造、桂瓦葺で、腰から上を黒漆飛壁とし、簾を入れた横長の小窓を開け、重厚さと繊細さを併せ持つ。敷地の北辺と西辺を区画しつつ、街路景観を整えている。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場ベンチュリー上屋	ながえじょうすいじょうベンチュリーうわや	1棟	尾道市長江三丁目	平23.1.26	鉄筋コンクリート造平屋建、切妻造、建築面積5.9m ²		尾道市街の丘陵上にある浄水場南端に建つ。桁行2.6m、梁間2.6m、鉄筋コンクリート造、切妻造妻入で、正面出入口に切妻屋根の庇を付ける。軒下や妻面に縦型風の持送りを付けなど、木造洋風建築を鉄筋コンクリート造で表現した上屋である。 大正14年築。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧高橋家住宅主屋	きゅうたかはしけじゅうたくおもや	1棟	尾道市日比崎町	平23.7.25	木造2階建、瓦葺、建築面積230m ²		栗原川沿いの敷地中央に東面して建つ。桁行18m梁間13m、木造2階建、入母屋造桟瓦葺で、南東隅に応接間と玄関を張り出す。周囲を開放的に造り、屋根は入母屋破風を複合させ、応接間に洋風意匠を採用するなど、変化のある外観になる大型住宅である。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧和泉家別邸	きゅういずみけべってい	1棟	尾道市三軒家町	H25.12.24			千光寺山西斜面の石垣上に立つ小住宅。木造2階建で下見板張の和館の南にモルタル塗の洋館を接続する。菱形の小敷地を巧みに利用しており、2階8畳座敷や階段の造作も丁寧である。入母屋屋根に切妻破風や小庇、露台をつけ、変化に富んだ屋根構成を見せる。		
国	登録有形文化財(建造物)	みはらし亭	みはらしてい	1棟	尾道市東土堂町	H25.12.24			千光寺山東方斜面の参道に面する木造2階建。高い石垣の上に建ち、東面に縁を設けて尾道水道の眺望を得る。2階北端に12畳の主座敷を設け、南端の室は敷地形状により上下階とも変形平面を呈する。屋根は入母屋造桟瓦葺で、軒は丸太の化粧垂木を構造に配る。		
国	登録有形文化財(建造物)	西山本館	にしやまほんかん	1棟	尾道市十四日元町	H27.3.26			旧出雲街道に面して建つ現役の旅館。木造二階建と三階建の棟が複数に組み合わされ、全ての客室が庭に面するよう工夫されている。丁寧な仕上げの数寄屋(すきや)風の和室のほか、かつて外国人船員の宿泊にも対応して洋室三室を持つなど、港町の風情を醸す木造旅館建築。		
国	登録有形文化財(建造物)	多門亭	たもんてい	1棟	尾道市東土堂町	平31.3.29	木造2階建、瓦葺	建築面積125m ²	千光寺山南腹にある旧料亭。切妻造りの純二階建で、下階に各玄関を設け、一階に中廊下を通して小座敷を並べ、二階に大座敷を配する。山腹に広がる市街地の歴史的景観の構成要素である。		大正9年頃／昭和40年頃改修
国	登録有形文化財(建造物)	向酒店舗兼主屋	むかいさてんてんぽけんおもや	1棟	尾道市久保一丁目	令2.4.3	木造二階建、瓦葺	建築面積77m ²	向酒店舗兼主屋は尾道市街地に建つ店舗兼用住宅。大屋根は桟瓦葺だが、一階正面の庇(ひさし)を本瓦葺として重厚に見せる。二階の建ちは高く、近代の町家の特徴を持っている。		大正14年頃

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	旧尾道市役所百島支所庁舎	きゅうおのみちしやくしょもしまじょちょうしゃ	1棟	尾道市百島町	令4.10.31	木造2階建、鉄板葺	建築面積251m ²	百島北東部にある役場庁舎。木造二階建、半切妻造で、縦長窓を基調に洋風とし、正面頂部ガラリに二階の四連窓が特徴的。二階はキングポストトラスで大広間とし、一階カウンター付事務室が往時を伝える。現在、ゲストハウスやイベントスペースとして活用。		昭和29年／令和元年改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧村井医院診療棟	きゅうむらいいいんしんりょうとう	1棟	尾道市御調町市	令5.8.7	木造平屋建、桟瓦葺	建築面積89m ²	山陽道と出雲街道が交わる御調(みつき)の町にある洋風の医院建築。診療棟は、寄棟造り桟瓦葺きで、外壁は下見板張と定規柱間にモルタル塗り仕上げとする。ベティメント付きの上げ下げ窓と石柱の門が街道沿いの歴史的景観を形成する。		大正7年／昭和中期・平成24年改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧村井医院門柱	きゅうむらいいいんもんちゅう	1基	尾道市御調町市	令5.8.7	石造、石椿付	間口1.9m			大正7年頃／昭和中期改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧宮地醤油店離れ(林美美子旧居)	きゅうみやちしょうゆねはなれ(はやしみこきゅうきょ)	1棟	尾道市土堂一丁目	令5.8.7	木造二階建、鉄板葺	建築面積12m ²	尾道駅に程近い商店街にある醤油店の付属建物。短冊形敷地背面側に建ち、離れや醤油蔵、一時貸家とした。当地では東屋を避けた二階東面は壁として妻側に窓を設けるが、その特徴を持つ。大正6年頃には小説家林美美子が入居しており、現在、資料館として活用。		明治中期／昭和51年頃改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧小野産婦人科医院	きゅうおのさんふじんかいいん	1棟	尾道市十四日元町	令7.3.13	木造三階建、鉄板葺	建築面積100m ²	尾道の中心部に位置する旧産婦人科医院。隅切した角地に建つ木造三階建てで、庇や付柱など直線的構成で角地を強調した外観が印象的な医院建築。現在は店舗等として活用。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧小林家住宅主屋	きゅうこばやしけじゅうたくおもや	1棟	尾道市長江	令7.3.13	木造二階建、瓦葺	建築面積172m ²	長江通り東側の石垣上に建ち、洋画家小林和作(わさく)が晩年まで居住した主屋。二階はアトリエとして用い、西面に掲出窓を開けた眺望優れた主屋。現在は小林和作の遺品展示や交流施設として活用。		
国	登録有形文化財(建造物)	イシネ事務機社屋(旧尾道警察署庁舎)	いしねじむきしゃやく(きゅうおのみちいさつしょちょうしゃ)	1棟	尾道市古浜町	令7.8.6	木造二階建、瓦葺	建築面積 248 m ²	かつて、市街地中央部に位置した、尾道警察署庁舎を移築し、事務所として転用した建物。木造2階建で寄棟造り桟瓦葺きで外壁に縦長の上げ下げ窓を配す。洋風の外観が警察署庁舎の面影を留め、地域の歴史を伝える貴重な遺構。		
国	登録有形文化財(建造物)	後藤鉱泉所店舗兼工場	ごとうこうせんしょんぱくこうじょう	1棟	尾道市向島町	令7.8.6	木造二階一部平屋建、瓦葺一部鉄板葺	建築面積321 m ²	向島にあるラムネなどの飲料製造販売所。敷地西側は工場及び倉庫を配し、東側は通りに面して店舗を増築し、全体に複雑な屋根構成とする。工場に製造機器を残すなど、町の瓶詰を伝える店舗兼工場。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	村井家住宅主屋 (旧市村郵便局)	むらいけじゅうたくおもや (きゅういちむらゆうびんきょく)	1棟	尾道市御調町市	※未告示(R7.11.21答申)	木造二階建、セメント瓦葺	建築面積213m ²	旧出雲往来に東面して建つ旧郵便局を併設する主屋と土蔵。当該地域は市村といわれた旧村で、戦後まで家畜市の立つ宿場町があり、建物はその宿場町の商店が立ちならぶ町並みの一角に位置している。江戸時代には、家主が大庄屋、御山奉行の役を務め、その役割にふさわしい建物の規模、造りとなっている。主屋は2階建切妻造棟瓦葺の町家の南側に一チやメグリオンで飾った石造風外観の郵便局を付加する。全体の平面は奥行きが深く、主屋は良材を用いた端正な造り。洋風の郵便局を備えた外観が街道の眼を引く。		(令和7年11月21日登録答申)
国	登録有形文化財(建造物)	村井家住宅土蔵	むらいけじゅうたくどそう	1棟	尾道市御調町市	※未告示(R7.11.21答申)	土蔵造二階建、瓦葺	建築面積64m ²	土蔵は主屋の土間北側に接続して建つ、2階建切妻造で露屋根形式の棟瓦葺で正面に下屋を付す。小屋組は曲がり梁を用いた小屋。主屋と一緒に街並みを形成する。		(令和7年11月21日登録答申)
国	登録有形文化財(記念物)	瓢箪島	ひょうたんじま		尾道市瀬戸田町 愛媛県今治市上浦町	平25.3.27		8,958平方メートル(全島 17,576平方メートル)	瓢箪島は瀬戸内海に浮かぶ瓢箪の形をした無人島で、広島県尾道市の生口島(いっちじま)と愛媛県今治市の大三島(おおみしま)の中間に位置する。島の周囲は約700メートルある。県境が横切る瓢箪形のくびれ部を除いて、島県境側の島面積は約6,500m ² である。愛媛県側の島面積は約2,500m ² である。島の名前の由来は、島の形が瓢箪に似てて名づけられたため、びりてして島の名前である。島の島民が心配して和解することになったという民話が伝承されている。島の周辺海域は良好な漁場であることから、その漁業権をめぐる紛争に端を発して生まれた民話であろうと考えられており、多発した境界争いの証拠として、島内には明治時代の境界石も残されている。また、瓢箪形の小島を詩らしく歌い上げた舟歌も伝えられており、島の風致景観は漁師たちの間でもとてもやされて来たことが知られる。		